
異常でもあり過負荷でもある転生者

風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常でもあり過負荷でもある転生者

【Nコード】

N4667T

【作者名】

風雅

【あらすじ】

めだかボックスに転生した神城真夜^{かみじょうしんや}が、箱庭学園でいろいろなことに巻き込まれるお話

処女作なので、よろしくお願いします。基本原作沿いです。

プロローグ

どうも、神城真夜です。

なんか今真っ白な空間にいます

「ここ、どこ？」

「ごめんなさい」

誰この人？

「あ、僕はあなたの世界の神です」

「マジで」

「マジです」

へえ、こんな人が神様なんだ

待てよこのパターンは、転生とかできるんじゃないやね

「はい、転生できますよ」

「よっしゃ、マジで、やったね死んでよかったわ」

「え、もう元の世界に戻れないんですよ！悲しくないんですか」

そか、もう戻れないのかまあいつか、何の未練もないし、楽しければそれでいい！

「ええ、どんだけ気楽なんですか、あなたは！」

「まあ、いいから進めようよ」

「そうですね、まずあなたの願いを四つ叶えます」

「そうだな、じゃあ、めだかボックスの世界に行きたいのが一つ目」

「次に、異常を四つ使えるようにすること過負荷を三つ使えることが二つ目」

「あれ、今言わなくていいんですか？」

「めだかボックスの世界に着いてから考えるよ」

やっぱ、今考えて変な能力だったら嫌だからね。

「じゃあ、そっちに着いてから考えてくださいね」

「三つ目は身体能力をめだかの10倍で知能が名瀬の10倍で」

「はい、わかりました最後の願いはなんですか？」

「うーんと目覚める場所を箱庭総合病院にしてください」
「本当にいいの、家族と過ごさなくて!!」
「はい、どうせ異常と知ったら俺を捨てるでしょう」
もう、捨てられたりするのなれてるし。
「わかりました、容姿は僕が考えます」
「お願いします、もういいですか?」
「はい、いいですよそれでわ、さよなら」
俺の下に落とし穴が現れた
「やっぱ、このパターンか」
そこで、意識が失った

プロローグ（後書き）

ありがとうございます
次は、設定です。

主人公設定（前書き）

作「あと、一週でテストめんどい」

神城「テストぐらい、がんばれよ」

作「無理だね、神城が変わりに出てくれよ!」

神城「嫌だね、めんどくさいそんなことより始まるぞ」

作「あ、そっかそれでは、ご覧ください」

神城「この、さき大丈夫か？」

主人公設定

神城真夜

容姿

身長 175 cm

体重 65 kg

顔は上の中

髪は黒色、肩に付く長さ

性格

面白いことが好き

異常

物真似

相手の異常や過負荷をコピーして、完璧に
使いこなす。『完成』ジ・エンドに似ている。

解放

自分の異常や過負荷の力を上げたり身体能力を
上げたりすることができる。

操り人形 パペットマペット

相手を操ることができる。

痛手保証

相手が受けた痛みを自分に与えてその
痛みを肩代わりする。オン・オフ可能

過負荷

無力な自分

触った相手の異常や過負荷を使えなくする。

指を鳴らしたら使えるようになる。オン・オフ可能

主人公設定（後書き）

作「ふう、疲れた」

作「話が進むにつれて設定を書いていきます」

神城・作「それでは、また会う日まで」

原作キャラとの遭遇（前書き）

作「やっど、はじまるぜ」

神城「そうだな」

作「うわ、何そのやる気のなさ」

神城「いいから、はじまるぞ！」

原作キャラとの遭遇

目が覚めたら、見たことがない病院にいた。
そっか俺は、転生したんだった。

「じゃあ、此処は箱庭総合病院か」

「診察まで、時間があるから原作キャラに
会いに行くか。」

俺は託児室の扉を開けたそこには、
一人の男の子がいた。

「え？、誰？」

「俺は神城真夜だ。よろしくな、お前は？」

まあ、知ってるけど。

「うん。ぼくは人吉善吉だよよろしくね！」

「ねえ！一緒に遊ぼう」

「うーん、よしわかった。此処にあるパズル全部解いてやる。」

パズルを解いているとおかつぱの
少女が入ってきた。

めだか目線

「世界には目標なんてなくて人生には目的なんてない」
それ以上に正しい答えがあるとは考えられなかったからだ。
そう考えれば、とても楽になれるのだから。

だから毎日のように続く検査に嫌気がさして待合室
から逃げ出したが

「おい！13番黒神めだかはどこ行つた！？探せ！！
まだそんなに遠くには行つてないはずだ！」

思つたより大ごとになってしまった。外に逃げることは無理そうだ。
ひとまず私は託児室に逃げ込んだ、そこにわ

「ハアーハツハツハツ！！」

「うわゝ、すごいすごい」

手を叩いて喜んでいる子供と笑いながら
パズルを解いている子供がいた

喜んでいる先客に挨拶することにした

「おい、そんな単純なパズルにてこずつておる？
貸せ、私がやってやる」

それはその子供のおもちゃを奪つただけだった。
私にとって挨拶とは自らの『異常性』を見せつけること
以外なかったのだ。

「ほら、解けたぞ」

「うわあ、すごいねきみ、ありがとう！すごくうれしいよ！」

「別に凄くなんかない、それに凄くたって何にもならない。私が生きていることに私が生まれた事に何の意味もないのだから」

「そうか？この世に意味の無いことなんて無いと思うがな」

パズルを解いていた子供が話し掛けてきた。

「だったら教えるがよい。私は一体何のために生まれてきた？」

「そうだな。善吉、パズルを解いてもらって凄く嬉しい気持ちになったんだろ」

「うん！」

「俺も善吉がお前のおかげで喜んでいるのを見て嬉しかった」

「だから、お前は皆を幸せにするために生まれてきたってことでいいだろ」

その言葉で私の心の中のもやが晴れたような気がした。

主人公目線

少しして、善吉とめだかと遊んだ、やべ！
もうそろそろ俺の診察が始まる。

「俺もう行くわ」

「っ！待て、名前を」

「今度会ったらな！」

まあ今度で言っても、会うのは、高校生になった時だけだな。

俺は通院しなくてもよくなり善吉とめだかには、会ってない。

その後、親が俺を売ったらしく、俺は黒服の男達に連れていかれそうになった

そうか、また俺は捨てられるのなら、俺がそんなの壊してやる！！

その後、全身の骨が砕けた。黒服の男と夫婦が家の中で、発見された。

原作キャラとの遭遇（後書き）

作「やっと、俺の夢えの一步」

神城「それより、テストはいいのか？」

作「え、テスト何それおいしいの？」

神城「現実逃避するな！このバカ野郎！」

作「あゝ、バカて言った奴がバカなんだぜ！」

神城「うるさい、子供かお前は！」

作「子供じゃない、中3だ」

神城「もう、めんどくさい皆さんどうか、こんな作者をよろしくお願ひします」

作「こんな、てどうゆう意味だ！」

神城「うるせー」

作「ギャー」

神城「それでは、さようなら！」

『壊れた玩具』（前書き）

作「学校疲れたわ」

神城「そうですか。」

作「なんだよ、その言い方」

神城「うるせー、始めるぞ！」

作「オッケー、それでは『壊れた玩具』ご覧ください！」

『壊れた玩具』

ヤッホー、神城真夜だよ！

あれから10年たった。

俺は今、犯罪者に攫われて、人がいないビルにいる所です。

「ガキ、お前には人質になってもらう！だから、親に電話しろ！！」

「ああ、俺に親はいないよ。だって、

俺が殺したからね」

そう、俺は自分の親を殺した。体の骨を全部、粉々にして。

まあ、後悔もしてないし悲しくもないから、どうでもいいけどね。

「はあ？何を言ってんだ。このガキは？」

「まあ、そんな事あんたらに話しても、意味ないか。

どうせ、あんたらは此処で死ぬんだから！」

俺はそこで殺気を出した。

「あれ、気絶しちゃった。どうしよう？警察に電話しようかな、
やっぱ、めんどくさいからいいや」

そのまま、俺は学校に向かった。

「もう、遅刻決定だな。まあいつか」

俺は、学校についてある教室に向かった。その、教室の端っこには、
袋を被った女の子と可愛い女の子がいた。

「ヤッホー、名瀬先輩と古賀先輩！」

そう、俺は今、名瀬と古賀がいる、中学校の生徒なのだ！

「あ、真夜君おはよー！」

「なんだ、真夜か」

もちろん、名瀬先輩と古賀先輩は、俺の異常と過負荷のことに、
ついては知らない。

「何だとは、ひどいですね。古賀先輩おはよー」

「うるせー奴だな、実験台にするぞ」

「それだけは、許してください」

この人の実験台になったら、絶対死ぬ。

「てか、名瀬先輩いい加減、袋を取ったらどうです？

俺、名瀬先輩の素顔見てみたいな」

まあ、マンガで見たことがあるんだけど。

「私も見てみたいな」

「嫌だね、俺は恥ずかしがり屋なんだよ！」

「そんなこと言って、実は見せたい癖に」

「そんなに、お前は実験台になりたいのか！」

「え、うそですよ？名瀬先輩ちよと待ってください、古賀先輩助けて「ごめんね。真夜君」うそだ。てか、名瀬先輩俺の話聞いてます？ちよ、やばいやばい、名瀬先輩ちよと待っ、ギヤアアア」

放課後

マジ、死ぬかと思った。トラウマになるな絶対に。

「てか今度は、殺人犯だし」

「これを見たからには、お前にも死んでもらう！」

そう言つて、男は真夜に包丁を刺した。

だが、逆に包丁が、真夜に触れた瞬間に、包丁が粉々になったのだ。

「ひい、化物！」

「おいおい、化物は無いだろ。俺は只の普通な中学生だぜ。

まあ、あんたに言つても意味ないか、もう、あんた壊れちゃえよ！」

『壊れた玩具・トイブレイク』

「あと、三年かめんどくさいな」

そこに、あったのは、さきまで生きていた殺人犯の全身の骨が全部折れていた死体しかなかった。

『壊れた玩具』（後書き）

作「ふう、疲れた。」

神城「これで、過負荷使うの二回目だな」

作「そうだね」

作・神城「それでは、感想お待ちしております。皆さん、さようなら」

箱庭学園初登校（前書き）

作「明日、テストだ。助けて、かみえもん」

神城「誰が、かみえもんだ！勉強しろよ」

作「俺は、いつ死ぬか分からないから、遊びつつける！」

神城「もう、だめだ。それでは、皆さんご覧ください！」

箱庭学園初登校

あれから、三年がたった。

「長かったあと、めんどかった。この日を、
どれだけ楽しみだったことやら」

そう、俺は箱庭学園に入学したのだ。

「原作まで、まだだしな。どうしよう?」

「なあなあ、その兄ちゃん」

この人は確か、そうだ反則王と言われている、
鍋島猫美だ。

「何ですか?」

「君、柔道部に入らへん?」

俺、部活とか入るき無いんだけどな。どうしよう?
断るか。

「すいません、俺、部活とかやる気無いんで」

「ええやんええやん。試しに来てみいな」

はあ、どうしよう? そうだ、こう言おう。

「暇な時に、きますよ。」

「そうかい。待つとるから、いつでも来てな」
まあ、知ってるけど名前を聞いたところ。

「先輩の名前は？」

「柔道部の鍋島猫美いうねん！」

「俺は、神城真夜ていいます。それじゃ、鍋島先輩」

「暇になったらおいでえな」

軽く手を振られたから、俺も手を振った。

「お、あそこにいるのは、確か、日之影空洞だ！
なんで、まわりを見ているんだろ？お、どこかに
行こうとしてるから、ついていこと」

「あ、みつけあれが、『知られざる英雄・ミスターアンノウン』
よし、コピーしたし行くか」

俺は、自分のクラスを見に行った。

「お、一組だ」

おお！あれは、善吉じゃん！久しぶりだから、
挨拶しにいこ。

「よお、お前も一年一組か？」

「ああ、お前もか？」

「ああ、俺は神城真夜だ、よろしく！お前は？」
知ってるけどな。

「俺は人吉善吉だ。よろしくな」

てか、善吉俺の名前聞いて、何も反応しないし。
まあ、あれから15年だしな、覚えてるわけないか。

「じゃあ、教室に行こうぜ」

「そうだな」

そのあと、俺は不知火とも仲良くなった。

「よし、初登校も終わったし、善吉に久しぶりに
会ったから、もう帰るか。」

明日は、めだかちゃんの演説か。ああ、原作まで、とっても長かつ
た。明日が楽しみだ！

クックック、アーハッハッハッ！。

箱庭学園初登校（後書き）

作「やっと、此処まで来た」

神城「そうだな」

作「二日間、テストだから投稿遅れるかもしれない」

神城「マジで！」

作「テストより、小説書きたいぜ」

作・神城「それでは、感想お待ちしています、皆さんまた会つ日まで」

「どこかで会ったことないか？」（前書き）

作「やっと、テスト終わったぜ」

神城「よかったね、テストは出来たのか？」

作「数学は38点だった！（キリッ）」

神城「もう、だめだこいつ」

作「過去を後悔するな、今を楽しく生きろ！」

神城「それでは、皆さんご覧ください」

作「アーハッハッハ！」

神城「うるせー！」

作「ギャアアアー」

「どこかで会ったことないか？」

「世界は平凡か？」

「いいや、俺は最高だと思うがな。」

「未来は退屈か？」

「それは、人それぞれだ。」

「現実 is 適当か？」

「違う、現実 is めんどくさいだけだ。」

「安心しろ、それでも生きることは劇的だ！」

「それは、どうだろうか。」

「そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ。
学業・恋愛・家庭・労働私生活に至るまで24時間365日私は、
誰からの相談でも受けつける！！」

「凄いな、めだかちゃんは、あんなめんどくさいことを
言えるなんて、流石だな。」

1ノ壱教室

「ねえ、聞いた？新しい生徒会長の噂」

「私達と同じ入学したての一年のくせに、冗談みたいに
態度エルな奴なんだって」

「引くほど美人なんだけどやることなすこと」

滅茶苦茶に型破りでさ、先生もビビッて手エ出せないそうだぜ」

「しっかし、あのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ、人前に立つのに、慣れてるっつーかさー」

「そうだよなー、俺なんてめんどくさくて、嫌だね」

「カツ、ありやあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのになれてんだ！」

「んーあーそりゃそーだね、そーでなきゃー」

「一年生で生徒会長になんかなれっこないか」

「それに、支持率98%！ぶっちぎりのナンバーワンだからなー！」
「てか、98%で凄すぎだろ。」

「かくゆう、私と真夜もあのお嬢様に清き一票を捧げたわけですが」

「全国模試で常に上位をキープ！偏差値は常識知らずの90を記録し！」

「手にした賞状やトロフィーは数知らず！スポーツにおいてもあらゆる記録を」

「総なめ状態！実家は、世界経済を担う冗談みたいなお金持ち！」

「ほんと、めだかちゃんはすごいな。あ、まだ不知火がしゃべっている。」

「全長263・0メートル、高度6万フィートをマッハ2で飛行！インテル入ってる！」

「いや、途中から人類じゃなくなってる」「
いや、マジでマッハ2で飛行ておかしいから。」

「で？善吉はどうするんだ？会長が、当選したってことは、
とーぜん善吉も生徒会に入るんだろ？」

「カツ！なわけねーだろ！これ以上、あいつに振り回されてたまる
かつての、

俺は絶対！生徒会には入らない！！」

善吉後ろで、めだかちゃんがコピてるよ。

「まあ、そうつれないことを言うものではないぞ善吉よ」

「ところで、貴様どこかで会ったことないか？」

きたよ、この質問。まあ、善吉に言っても分からなかったから、
大丈夫だろ。

「いいえ、会ったことはありませんよ会長さん。」

あと、俺は貴様じゃなくて、神城真夜で、言います」

「そうか、あと貴様と呼んですまなかった。神城同級生よ」
ふう、きずかれないでよかった。

「いいえ、気にしないでください」

「それじゃあ、行くぞ善吉」

善吉、頑張れ。

「あれ？人吉の奴どこ行っただ？」

「ん？よお、日向人吉は、会長さんに連れてかれたぞ」

「人吉と例の生徒会長てどんな関係なんだ？」

「恋人同士なんだぜ」

まあ、嘘だけど。

「本当なのか！」

信じたよ、日向の奴（笑）

「違うよ、只の幼なじみだよ」

「ああ、不知火バラすなよ！」

「まあ、あたしに言わせりゃただの腐れ縁なんだけどね」

「え、俺の話、無視ですか？何これ、新手のいじめですか？」

人吉目線

「・・・つたく、普通に連れてくるってことができねーのかよ、生徒会長さん」

「ふん、私の誘いをすげなくし続ける貴様が悪い」

「それに、よそよそしい呼び方をするものではないぞ、昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい！」

「てか、お前なんで、真夜に話かけたんだよ？」

「いや、昔どこかで会ったことがある気がしたんだ」

真夜目線

さてと、俺も行動しますか！

「どこかで会ったことないか？」（後書き）

作「いやゝ、今回は長かった」

神城「そうだな」

作「それでわ、皆さん感想お待ちしています」

作「さあ、神城さきの続きをしようじゃないか？」

神城「しつこいんだよ」

作「ギヤアアアー、ふ俺を倒しても、第二の俺がお前を倒す
アーハッハッハ」

神城「うるさい！」

作「ギヤアアアー」

「嫌です」(前書き)

作「今日は、台風で家からでれない」

神城「そういえば、台風が来たのか」

作「神城ちゃんあーそーぼー」

神城「嫌だ。小説始めるぞ！」

作「はい、先生」

神城「誰が、先生だ！」

「嫌です」

やあ、神城真夜だよ！俺は今剣道部に行く
途中のめだちゃんと善吉を尾行中だぜ！

ガラッ

「あ？誰だアお前ら」

「1年13組生徒会執行部会長職黒髪めだかだ、
目安箱への投書にもとづき、生徒会を執行する！」

「あー聞いてんぜ！今をときめくイカれた新会長つて奴だろ？
こんなところにお出でになるとは驚きだな！

支持率98%だか何だかしらねーが、生憎俺らは残りの2%の方だ
ぜ！！」

凄いねこの人達は、めだかちゃんの噂を聞いてないのか？
え、俺は今物陰に隠れているのさ。

「貴様がリーダーの門司三年生だな？剣道か、懐かしいぞ
私も昔少しだけかじったよ。この木刀もよく手入れされておる。
黒檀とは随分と張り込んだものだ」

「！？（え・・・あれ？いつの間に取られた！？
感覚どころか気配もしなかったぞ！？」

おお、あれが無刀取りか、やっぱりめだかちゃんはすごいな。

「かつ囲め、おめーら!!」

「おっおうつ!!」

めだかちゃんに、かなうわけないよ。

「…………制服改造に染髪、装飾…………」

校則違反のオンパレードだな。まあ、私もあまり人のこと言えんが」

絶対に、人のことは言えないでしょう。

あ、分身の術だ。

「なっ何イイイ!!」

「それでもタバコだけは控えておけ。

貴様達の健全な成長を損害するし何より

将来の楽しみがなくなるぞ!」

「え…………オレのタバコ!」

「な…………何だ今の!」

「忍法か!」

まあ、一般人の目には分身してるようにしか見えんか。

あんなの普通にできるけど、俺はめんどくさいからやらないだけだ。

「しかしまあ、荒れ放題だな、よくもここまで学園施設を荒廃させたものだ。」

逆に感心したくなる」

「なっなんだよセツキョーかよ！」

「お呼びじゃねーんだよ会長さんよお！」

「いい気になってんじゃねーぞコラア！！」

「哀れなことだ」

「！？」

これは、あれがくるんじゃないか！

「貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている。
何か重大な理由があつて挫折を経験し道を踏み外してしまったとし
か考えられん」

きたよ、これが黒神めだかの真骨頂『上から目線性善説』
凄い勘違いだな。

「親に見捨てられたか？」

「良き師に出会えなかつたか？」

「友に裏切られたか？」

「なんで、ポーズとるんだ？」

「安心しろ、私が貴様達を更生してやる！」

「剣の事以外何も考えられないようにしてやる」

「いや、駄目でしょ！」

「矯正してやる、強制してやる
改善してやる、改造してやる」

生徒会長が改造とか強制で言ったら絶対駄目だから！

「二度とだらけようなどと考えぬよう
泣いたり笑ったりできなくしてやる」

それただの、拷問だから！

「まずは素振り１０００回からだ！
貴様達、今日は歩いて帰れると思うなよ！！」

バレたら俺もやらされそうだから帰るか。

「貴様もやるぞ、神城同級生」

「神城！？」

あ、バレちゃった。

「いつ、分かりました？」

「物音が聞こえたから、音の場所を見た時だ」

俺いつ音だしたんだろ？もう、逃げれないな。門司先輩達といっしょに叫んでおくか

「ギアアアアア・・・」

数時間後

やっと、終わった。

「もう、帰る」

早く、家に帰って寝たい。

「おい、その貴様王の前で何してる」

「・・・誰？」

「俺を知らぬとわ、それより貴様何している」

あ、こいつ都城王土だ。そうだ！

都城を挑発して、都城の『人心支配』をコピーしよう。

「え、もしかして？ナルシスト？」

「貴様、王に向かってそのような口を聞くとは
無礼者めが！『跪け』」

「嫌です」

「・・・何？」

おお、都城が驚いている。

「王土の『言葉の重み』が効かないなんて！」
あ、行橋だ。身長小さいな。

「さよなら、都城先輩と仮面の人」

「待て！貴様は何者だ？」

「俺は、神城真夜どこにでもいる只の普通ですよ」

やっと、帰れる。あと、都城の異常が
取れたのが一番の収穫だな。

「嫌です」(後書き)

作「台風、月曜日まで続け」

神城「また、変なことやってるよ」

作「はあ」

神城「これは、ずっと続けるな」

神城「それでは、皆さんさようなら」

作「はあ」

「雑草育ててどうすんだよ、アホが!!」(前書き)

作「昨日台風で今日の昼まで家が停電した」

神城「どんまい」

作「まあその話は置いてと、それでは、8話ご覧ください」

「雑草育ててどうすんだよ、アホが!!」

はあ、まさか王土に会うとは思わなかったぜ。

これから、どうしようかな？フラスコ計画協力しようかな？
あ、人吉だ。フラスコ計画のことはあとでいいか。

知られざる英雄を使って人吉を尾行中。

「まったく不知火の奴、お嬢様のこと案外わかってないよね」
だとお!?

俺は2歳の頃からずっとあいつのことが一番わかってるんだよ」

普通に2歳から一緒だったら、そう思うのも当たり前か。

剣道場

「カツ、何だかしらねーけど無性にイライラするぜ!」

いや、知らんがな。カルシウム取れ善吉。

「な、何イイイイ!?どうなってんだこりゃ・・・
昨日まで廃墟当然だったのに・・・」

やっぱりめだかちゃんは凄いな、一家に一台欲しいな。

「遅いぞ善吉、稽古開始時間はどうに過ぎておる、
遅れた分帰り倍に遅くなると心得よ!」

掃除婦姿だ。めだかちゃんて形から入るタイプなの？

「しかし連中も遅いな、最近は時間にルーズな者ばかりだ」

「おっ遅いも何も来るわけねーだろうが！

道場掃除すりゃ連中が心開くとも思ったのか！？」

来るんだよね、剣道部は。

「大体お前、なんでここまでしてんだよ

あんな連中お前にとっちゃ見知らぬ他人だろ？」

「愚問だな、わたしは見知らぬ他人の役に立つため生まれてきた」

そっぴや、めだかちゃんがそう考えるようになったのは、

善吉と俺がきっかけだったな。

「順位も記録も下らん、誰かの役に立った時だけ私の心は安らぐのだ！」

「………羨ましいねどうにも！俺もお前ほど才能があったら、そんな風にいきたかもな！」

「才能か………、それも下らん言葉だ「下らなくねーよ！みんなそれがねーからガッツついて生きてんだよー！」

まあ、普通はそくだよな、よし屋上に行って寝るか。

人吉目線

なんだよ・・・これじゃまるで・・・
俺が悪いみたいじゃねーか。

（私には貴様が必要だから、傍にいてほしいだけなのだ）

馬鹿げてる・・・あいつに俺が必要だったことなんてあるもんか
あいつは気づけば人の上に立ってるような奴だった。

その圧倒的なパラメーターゆえ絶対王政さながらの振る舞いゆえに
妬まれながらもやつかまれながらも清濁併せ飲むその生き様に結局
は、

誰もがあいつを好きにならずにはいらなかった。

たとえ、どんな痛い目を見たとしてもきつとあいつは意にも介さず。
それから同じように生きていくのだろう。

「分かってんだよ、確かに悪いのは俺なんだ・・・」

俺は後ろから誰かに殴られ意識を失った。

「ったく・・・、ホント！アテにならねえ生徒会だよなあ。

僕は、追い出せつつって頼んだんだぜ？

雑草育ててどうすんだよ、アホが！！」

「雑草育ててどうすんだよ、アホが!!」(後書き)

神城「おい、今回俺あんま出てきてないじゃん」

作「まあ落ち着け次の話に出番があるから」

神城「ホントだな？」

作「ホントだよ！」

神城「わかった。信じよう」

作「それでは、皆さんごきげんよう」

「え、俺なんかしました？」（前書き）

作「さあ、今日で、二作も投稿するぜ！」

神城「おい、ホントに出番あるんだよな？」

作「ちゃんとあるから、ほらやるぞ」

作・神城「皆さんご覧ください」

「え、俺なんかしました？」

「善吉その頭どうしたんだ？」

「いや、誰かに後ろから叩かれたんだよ」

日向の奴が。

「早く、保健室に行ってこいよ善吉」

さてと、俺は剣道場に行くか。

ドカツバキングシャツ

「ったくよく、高校ではいい子ちゃんです
通したかったんだけどさ」

「だ……誰だお前……？」

「僕？僕は真面目に一年生ですよ」

「真面目に剣道がしたい、真面目で真面目な男です。」

「ただ聞いてください！僕団体行動とか上下関係とか苦手です、
先輩とか顧問とかと揉めて、いつもボコっちゃうんですよ。」

「それで試合でねーの」

「いや、まず顧問とかボコるなよ。」

「剣道部よく辞めさせられなかったな。」

「う．．．．．それで、

剣道部が休部中のこのガッコに来たってわけか」

「ピンポン！ここでなら一人で好きにできますからね。

でも計算外、剣道場には招かれざる先客が！

そこで例のバケモノ女こと生徒会長に草むしりをお願いしたんですけど

うまく事が運ばねーもんですねえ！

あ、助けを期待してんなら無駄ですよあの女、
今頃役員募集演説の真っ最中ですから」

そろそろ、出番かな？

「しっかし、こんなにキレーに掃除してくれたのは助かったかな？
立つ鳥跡をにごさずっスね」

確かにキレーだよな。

「ま．．．．．待てよ。

勝手なこと吠えてんじゃねえよ！！

たった今思い出したわ俺は昔剣道少年だったんだよ！！」

「俺も．．．．．」

「俺もだ．．．．．」

「俺なんか日本一の剣士目指してた．．．
気がする」

こんなにボロボロなのに、がんばるじゃないか先輩達。

「……………うつぜえ！」

ドロップアウトした奴が簡単に改心して
立ち直ろうとしてんじゃねーよ！！

剣道三倍段って知ってたか！？

僕はあんたらの三倍強いって意味だ！！」

めんどくさいけど行くか。

ガシッ！

「もうそこらへんにしろ、日向！」

「っ！？邪魔すんじゃないよ！！」

「オイよく聞け日向。」

お前には改心して頑張ってる人間を
邪魔する権利はねえんだよ！！」

「うるせえ！！お前剣道三倍段って知ってたか！？」

ドカッ

俺は日向の顔に右ストレートを叩き込む

「知るかよ！ほら、俺バカだから」

「ぐ……………が……………ああ……………」

さて、善吉は来なかったし帰るか。

「おい、お前・・・なんで俺なんかを助けた？」

「理由ですか？それは、善吉を叩いた罰と
会長さんの頑張りを無駄にしたくないからですよ。
先輩達、剣道頑張ってくださいね」

翌日

「あ、会長さんじゃないですかどうしたんですか？」
なんで、一組に来ているんだろう？

「神城同級生昨日はありがとう」

「え、俺なんかしましたか？」

「昨日、門司三年生達から聞いたぞ、
神城同級生が助けてくれたと言ったからな
お礼を言おうと思って来たんだ」
ああ、昨日のことか
急にお礼を言われたからビックリした。

「いいですよお礼なんか。
ただ、俺は頑張ってる人達を助けただけですから」

「うむそうか、神城同級生貴様生徒会に入らないか？」

「やめときます。めんどくさいので
あと、俺のことは真夜て呼んでください」

「わかった」

「じゃあ、俺行きますね。
会長さん生徒会頑張ってくださいね」

「うむ、いつでも生徒会に入っていかな真夜」

あと、剣道部は日向が指導している。

そして、善吉も生徒会に入っみたいだ。

次は、柔道部の所から介入しよ。

「え、俺なんかしました？」（後書き）

作「やっと、書き終わった」

神城「よく、頑張った」

作「ちゃんと、出番があつたろ」

神城「俺はこれで満足だ」

作・神城「皆さんさようなら」

柔道界のプリンス（前書き）

作「いやゝ、久しぶりの投稿だぜ」

神城「まったくだ」

作「そう怒んなよ、真ちゃん」

神城「うるさい！10話もう少しで始まるぞ！」

作「はいはい、わかりましたゝ。ごほん！

それでは、皆さんご覧ください」

柔道界のプリンス

さて、俺は今柔道部にいる。

何でいるかって？その理由は、
阿久根高貴を見に来たからだ！

「おお、真夜クンやん。久しぶりやね」
あ、鍋島先輩が話かけてきた。

「お久しぶりです。そういえば、
鍋島先輩は柔道部の部長でしたね」

「そうやで。真夜クンは柔道部になんか用？
まさか、柔道部に入部しに来たんじゃ！」

「違いますよ。ちょっと、柔道界のプリンスと
謳われる阿久根先輩を一目見ようと来ただけですよ」

「残念やな、じゃあウチは用事があるから
好きに見たらええよ」

「ありがとうございます」

さて、あそこでは善吉と阿久根先輩が喋ってますが・・・

「何もできない虫のような虫とは言えキミももう高校生だ
大きい岩の下に潜んでいた虫の習性は分かるが、
そろそろ独り立ちすべきじゃないのかい？」

「……独り立ちできてねーのはどっちですか。何も出来ない？変な変態をめだかちゃんに近づけないくらいのことはできますよ？」

どうしよう。この空気すげえーいづらい
そうだ！

「そ、それにしても会長さんはすごいですね。柔道部を全員まとめてでも圧倒してるなんて」

「ああ、流石だなめだかさんは中学のころよりも輝きを増している！それよりキミは誰だい？」

「あ、俺は神城真夜でいいです。
よろしくお願いします阿久根先輩」

はあ、いちいち先輩に敬語使うのめんどくさい

「君はどこかの虫とは違い礼儀が正しいな」
この人ただけ善吉が嫌いなんだよ！

あ、鍋島先輩が善吉に話かけてる。

「凡人のクセに天才に付き従つとうジブンのほうがよっぽどスゴイやん。なあ？部活荒らしの人吉くん？」

「え、善吉部活荒らししてるのか。
てか、鍋島先輩で善吉のことえらく気に入ってるようですね」

「うん！人吉くんみたいながんばり屋さんが
うちはめっちゃ好きなんよ」

「そうだ！阿久根先輩と善吉が勝負してどっちが生徒会にふさわしいか決めればいいじゃないですか
善吉が勝ったら今のまま生徒会にいて、阿久根先輩が勝てば善吉は柔道部の次期主将になり、阿久根先輩は生徒会に入る
というのはどうでしょう？どうですか？阿久根先輩と鍋島先輩」

「うちはそれでかまへんよ」

「僕もそれに賛成だがハンデをあげよう
僕が十回取るまでに人吉君が一本でも取れたら人吉君の勝ちでいいよ」

「善吉、俺の娯楽のために頑張れ」

「ええ！？真夜てめえ覚えてろよ」

あ、めだかちゃんが帰ってきた。

「会長さん、お疲れ様です」

「ん？真夜か私はそんなに疲れていない」

「そうですか。あ、準備ができたみたいですよ」

「それでは始め！」
ドンッ

早くも一本取られちゃた。

「人吉君、君には何もできないというのは訂正しよう。
君のその努力と根性は認めよう。
だが、それだけでは僕には勝てない」

その後も善吉は阿久根先輩から一本も
取れず九本目まで取られた。

そろそろめだかちゃんの応援がくる。

「善吉、私は如何なる場合においても
決して私は貴様に勝てとは言わない」

でも、これはしんどいぞ。

「だから勝つて!!
貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ
困るぞ泣いちゃうぞ!」

う、うわあ、これが黒神めだかの真骨頂その二『シンデレ』か・・・
・
ほんとにいつもとキャラが全然違うな。

「お前が泣いてるとこなんて見たことねえし見たくもねえよ!」
ズドンッ

双手刈りで決まった。やっぱ原作と同じか。

「じゃあ、俺は帰りますね」

「もう帰るんか？」

「はい、今日は阿久根先輩を見に来ただけですから」

「へえー、じゃあ勝負しようや」

「いいですよ」

阿久根先輩と一度だけ戦いたかったんだよな！

「おーい阿久根くん！真夜くんが勝負したいそうなんやけど」

「ええ、構いませんけど」

「じゃあ、柔道服に着替えてきてな」

準備終了

「それでは、阿久根高貴対神城真夜の試合を始めます！
お互いに、礼！」

「お願いします」

「お願いします」

「それでは………始め！」

阿久根先輩のマネして後手必殺をするか。

バツ

阿久根先輩が俺の胸ぐらを掴む。

俺は阿久根先輩の腕を掴み一気に背負い投げで決めた。

ズドン！

「っ！？」

「なっ・・・！？」

「・・・！」

「・・・審判」

「あ・・・こ、この試合、神城真夜の勝ち」

「はあ、疲れた。じゃあ、俺は着替えて帰りますね」

「ホンマに柔道部入らへん？」

「入りませんよ、あれは阿久根先輩がさっきの勝負で疲れたことでできた奇跡ですよ」

鍋島目線

何なんや、あの新生は阿久根クンを瞬殺ってありえへんやろ！

善吉目線

真夜のことは、どこにでもいるノーマルだと思っただけであいつは何なんだ？

真夜目線

次は、あいつに会いに行くか

柔道界のプリンス（後書き）

作「ふう、疲れたぜ」

神城「今度からは、早く投稿しろよ！」

作「はい、わかりました」

神城・作「それでは、皆さんさようなら」

「よろしくな」(前書き)

作「よし、がんばっていこう」

神城「どうしたんだよ。急に」

作「いや、なんか暑かったらテンションが

おかしくならない真ちゃん？」

神城「知るかよ。そして、真ちゃんて呼ぶな！」

作「はいはい、それじゃあ、11話ご覧ください」

「よろしくな」

ヤッホー、神城真夜だよ。

今日は部活動対抗水中運動会だけど

俺は学校をズル休みしています。

その理由はあるの球磨川禊と友達になるためです！

球磨川の学校に着いたけど・・・

うわぁ、そこら辺にネジで貫かれた先生や生徒がいて、
かなりグロテスクです。

あ、球磨川君を発見！

「おい、君が球磨川君？」

球磨川が振り向く

「『君は誰？』」

「俺は神城真夜で言うんだけどさ
よければ友達になってくれよ」

「『ふうん』」

球磨川が近づいてくる。

その時・・・

グシュッ

球磨川の持っていたネジが俺の

頭に刺さる。

「『あーあ、死んじゃった』」

「おいおい、急に刺すなよ。」

ビツクリするだろ!!」

「『?』」

「俺はただ自分の過負荷を使っただけだ」

球磨川は俺に向かってくる。

俺は球磨川が近づいてきた時に
球磨川を殴り飛ばした。

「『こんなことしても無駄だよ』」

球磨川は『大嘘憑き』を使おうとしたが
使えなかった。

「『あれ?』」

「残念だな。『大嘘憑き』は俺がお前を殴り飛ばした時に
俺の過負荷で使えないようにした。

俺と友達になるか? 球磨川君?」

「『………うん、キミとは

いい友達になれそうだね。よろしく、真夜君』」

「こちらこそ、よろしくな球磨川」

俺は自分の過負荷を解除して球磨川の『大嘘憑き』を使えるようにした。

そして、俺は球磨川の電話番号とメールアドレスを教えて貰った。まあ、球磨川の『大嘘憑き』は俺の『真実と虚偽』に似ているからコピーしなかったけど。

次は雲仙冥利とめだかちゃんが会う所から介入しよう。

「よろしくな」(後書き)

作「けっこう、話すすんでるよな」

神城「そうだな」

作「それでは、皆さんまたお会いしましょう」

風紀委員会（前書き）

作「いやー、久しぶりの投稿だ」

神城「お前、投稿するの遅いんだよ」

作「いや、最近、中体連やら新しく投稿する

小説の設定を考えているのだよ」

神城「まあいいか、好きにすれば」

作「神ちゃんひどい、もういいし12話始めるからよ」

風紀委員会

オーケストラ部

雲仙目線

「僕ちゃん風紀委員会委員長の雲仙冥利でーす？

本日は皆さんを肅清しに来ましたー！皆さんの発する騒音が
うっせーつつ苦情が殺到しておりますてゆえに適切な
処置を取らせてもらいたいと思いまーっす！」

「（ヤベーっすよ部長！風紀委員会に目エつけられるとか
俺らかなり終わってますよ！）」

「（取り乱すな！所詮相手は子供だろう？今まで通り
テキトーに言いくるめて紳士的に引き取り願おうぜ！）」

「ねえ、雲仙くんオーケストラというのは大音量で演奏するものだ
よ。

だから、ある程度周りに迷惑をかけてしまうのは仕方ないことな
んだ

まあ、これからはなるべく気をつけるから今日のところは勘弁して
もらえないかな？そうだ、お菓子があつたな副部長！

雲仙くんにアメちゃんをお土産に持たせてやって」

ボキンッ

「ボキンッ……ってえええ！？」

「人の身体気安く触ってんじゃねーよボケ！
それから風紀委員会に言い訳や賄賂が通じると思ってたんじゃねーぞ
アホが！」

オレが出張ってきた時点で死刑確定なんだよテメーラは！
殺戮してやるから迅速に死亡しろ！！」

雲仙の殺戮と言う名の粛清が始まった

真夜目線

お、あそこにいるのは、めだかちゃんと不知火だ。

「ヤッホー、会長さんと不知火！」

「お、真夜か久しぶりだな」

「お久しぶりですね。ところで、会長さん
どこかに行くんですか？」

「ああ、今からオーケストラ部に行く途中だ」

「そうですかじゃあ、俺もいきますよ！暇ですから
まあ、ホントの理由は雲仙に会いに行きたいからだけど

「黒神さん・・・と不知火さんと・・・」
そつえば鬼瀬とは会ったの初めてか。

「あ、すまない。俺は神城真夜だ」

「私は鬼瀬針金です。真夜さんよろしくお願いします」

「ああ、こちらこそよろしくな鬼瀬！

ところで、鬼瀬はタオルを持ってどこに行くんだ？」

「私は音楽室へ行くところなんです」

「じゃあ、俺達と同じだから一緒に行こう」

音楽室

「お、鬼瀬ちゃんじゃん タオル持って来てくれたんだ。
サンキュー」

「あ、は、はいっ（え・・・なに？なんですか、これ？
一体何を使えばこんなことができるんですか！？）」

そこには、穴が開いているオーケストラ部の楽器があつた。

へえ、これが『スーパードール超躍弾』の力がすごいな！

「ったく・・・オレは本当にダメだなー。返り血まみれなんて
いつものことなのに、いつもタオル忘れちゃうんだよねー。
で、なに、黒神めだか？なんでデメーがここにいるわけ？」

めだかちゃんが雲仙にオーケストラ部に來た理由を話たら雲仙が
言い放った。

「甘えんだよ！話してわかるか！事情なんか知るか！！ルールを破
った

奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！それをなあなあにボカしまつたら

事情さえあれば許してもらえつつって同じことを繰り返すに決まってるだろーがよー！やり過ぎなけりゃ正義じゃねえ！それがオレのポリシーだー！」

「（・・・そう！私は、そのポリシーに賛同して風紀委員会に入った！でも、さすがにこれは・・・やり過ぎ過ぎるー！）」

「（おつ嬢様ー言うまでないと思いますけどこの子相当ヤバイですよ。この子がしきるようになって以来風紀委員会はさらに過激さを増したと言いますからね）」

「おいおい、そのエアオツパイ！オレ達風紀委員会はあくまで平和を愛する正義の集団だぜ？不正を正すことがオレ達の唯一の目的だ暴力も武装もただの手段に過ぎねえ。勿論黒神！テメーと敵対するつもりもテメー率いる生徒会執行部と敵対するつもりも・・・あるっ」

ガッ

めだかちゃんの頭にスーパーボールが当たった。てか、これ俺の出番はあるのか？

「・・・？おかしいな今のはただのアイサツ代わりだぜ？見えねーまでもよけるくらいの手加減はしたつもりだけど？」

「・・・貴様から攻撃される理由がない、ゆえによける理由がない」

「・・・へえ、面白いコト言うじゃん・・・もっぺん同じコト言えたらベタ褒めしてやんよ!」

今度は下からか

しかも、さっきより全然速い

「ケケッ」

「貴様から攻撃される理由がない、ゆえによける理由がない言ってやったぞ褒めるがよい」

「・・・素晴らしい!（こりやすげえわ、ありえねー心身ともに噂以上のバケモノだぜ黒神めだか!）」

「やつ、やめてください委員長!黒神さんの言う通りです!今生徒会と敵対する理由なんかないじゃないですか!」

「理由ならあるじゃねーか鬼瀬ちゃんいつの時代だつて正義は聖者を弾圧するモンだろ?」

「ふざけないでください!これ以上の暴力行為は一人の風紀委員として見逃せません!」

「ケケ!このオレ相手に随分と言ってくれるじゃん好きだぜーオレ!鬼瀬ちゃんのそいうトコ!」
「ただ、やっぱ理由はあんだよ正義と聖者は

相容れねえどつちかが潰れるしかねーんだよ！黒神イ、
テメーのスタイルって上から目線性善説とか言われてる
らしいじゃん。

だったら、オレのスタイルは見下し性悪説だ！

テメーが花を育てる側ならオレは芽を摘む側なんだよ！！」

「確かに私と貴様では主義が違うようだがしかしそれは、
話し合いで解決できるレベルであろう敵対する理由は
変わらないぞ」

「とことん上から目線だな黒神！だっけど、
もうそんなレベルじゃねーとオレは思うぜえ？

なんせオレは既に生徒会潰しの刺客を三人放ちまってるんだからな
あ！！」

「………やれやれ愚かなことをしてくれたものだ」

「はあ？」

「不知火ここは任せたぞ」

「はい？」

「今度私が手ずから満漢全席を振る舞ってやるから頼むよ」

「あ！？どこに行こうってんだよ黒神！
お仲間を助けに行こうってか！？今から
こっから間に合うワケねーだろが！」

めだかちゃんにたくさんのスーパーボールが

当たったがそこにはめだかちゃんはいなかった。

「あり？」

さて、めだかちゃんは善吉達を助けに行ったから俺は少し雲仙と遊ぶか。

「何のつもりだあ？エアオツパイ」

「いつやあゝ 本当はこーゆーの不本意
なんだけどでも任されて頼まれちゃたしい？」

「は？なんだそりや？テメーでオレが
止められるとも思うのかよ」

よし、俺の出番だ！

「じゃあ、俺がやってやるよガキ！
不知火、お前は下がってろ」

「あ？テメーみたいなノーマルが
オレをガキとか言ってるさらに、止めるとかなめてんじゃねーよ！！」

雲仙が俺に向かって、
スーパーボールを投げてきた

「だから、お前の武器がスーパーボールで所
がガキなんだよ」

俺は雲仙が投げてきたスーパーボールを

キャッチした。

「テメーどうやって取ったお前、
ノーマルじゃねえだろ！」

「何言ってるんですか？ただスーパーボールを
キャッチしただけですよ。あと、俺は只のノーマルですよ
不知火、俺行くとところがあるからあと任せたぞ」

よし、遊んだし

生徒会室に向かって雲仙が来るのを
待つか。

風紀委員会（後書き）

作「やっと、風紀委員会との勝負だ」

神城「そうだね」

作「じゃあ、もう終わるか」

作・神城「皆さん、また会いましょう」

「おせエよボケ」（前書き）

作「いやー、投稿するの遅くなっちゃた」

神城「なっちゃた。じゃねえだろ!!」

作「誰にも、事情があるんだよ」

神城「うるせー、説教はこれが終わってからだ」

作「……」

神城「それでは、皆さんご覧ください」

「おせエよボケ」

俺は今生徒会の中にいます。

「よお、善吉遊びにきたぞ」

「真夜かこっちは大変なのに
何しに来たんだよ」

「だから、遊びにきたんだって言っただろ！
久しぶりですね阿久根先輩」

「久しぶりだね真夜君」

あ、状況がつかめてなくて喜界島が今空気だ。

「キミが新しく生徒会に入った会計の喜界島さんが
俺は神城真夜で言うんだよろしく」

「うん、よろしく」

「ところで会長さんなんでスーパーボールを
持っているんですか？」

「これから、雲仙二年生の使う奇妙な術につうて
話そうとしていたんだ」

「たしか変な起道の正体不明な飛び道具

とかだっけ？」

「うむ、このスーパーボールがその正体だ！」

「はあっ！？風紀委員長の武器がスーパーボールだったのか！？」

まあ、誰でも雲仙の武器がスーパーボールで聞いたら驚くよな普通。

「うむ十中八九間違いなかるうこいつの反射力・反発力は大したものだぞほらこのように指で弾くと壁という壁に跳弾して………な？」

「「なじゃねーよ！」」

急にスーパーボールを使うなよめだかちゃん危ないだろ！

パチパチパチ

「いやーお見事お見事！一年以上そのテクでやってきたけどタネを見抜いたのはテーマで二人めだぜ黒神！」

「もちろんただのスーパーボールじゃ話になんねーから素材に気を使ったりなんたり武器になるようそれなりの改良は施してあるがね。

ま、でも正体が割れたらそれで終わりな子供だましましたよ。言うのなら手品みてーなもんだ」

雲仙のヤロー炸裂弾を床にばらまいたか

「……………何このヒネてそーな子供。全然可愛くないんだけど」

（（喜界島さん空気読んで！！））

「何の用だ雲仙二年生」

「用がなくちゃ来ちゃいけねーってのか？冷てーこと
おっしゃるなよ悲しいなあ！」

そう言いながら窓の力ギを閉める雲仙

「まあ仲良くしようぜ黒神一年生オレ達は
怪物同士で化物同士で似た物同士なんだからよお」

「いや実際テメーが入学してきた時から思っちやいたんだよ。
テメーとオレは鏡写しさながらによく似てるってなあ！」

「…………でも、左右逆なんだろう？」

そろそろ炸裂弾のことを言うか。

「会長さん！！俺たちの足元に散らばっているのは
スーパーボールじゃない！！火薬玉だ！！」

「なに！？」

「おつとバレタかい？ダメだなーオレって本当にダメだ！
手品下手過ぎ！だがまあ遅い仕込みはギリギリ終わっている！」

炸裂弾『灰かぶり《シンデレラ》』実はスーパーボールより

こっちの方がオレの本筋でな一個ありや老朽化した壁くらいならヨ
ユーで

ブチ抜けるシロモノだ」

「……密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミも
ただじゃすまないよ」

「そうだ子供っぽい脅しはやめろ!!」

俺はめだかちゃんに近づいて小声で話しかけた。

「（会長さんは火薬玉をなんとかしてください！
俺は善吉達を守ります!）」

「（わかった）」

「テメーらニュースとか見てねーのか？」

ダッセエな。最近のガキは何考えてかわかんねーんだぜ？」

「どーするよ黒神。こっからオレを見事改心させて

見せるんだろ？それともやめてくださいってお願いしてるか？」

「……やめてくだ「おせエよボケ」」

ドゴオオオン!!!!!!!!!!

「おせエよボケ」（後書き）

神城「おいおい、やべえんじゃねえか」
作「……………」

神城「大丈夫なのか生徒会は」
作「……………」

神城「そっいえば説教するんだった」
作「……………」

神城「なんで、お前さっきから黙ってるんだ……………」

「説教が嫌なので逃げますby作者」

神城「どこ行ったんじゃボケー！！」

「うるさい」(前書き)

作「皆さん、投稿するのが遅くなってしまってますいません」

神城「まっかくだぜ、こっちは風紀委員会との勝負で忙しいのに」

作「・・・じゃあ、こなればいいじゃん」

神城「なんか、言っただか」

作「いいえ、何も。それでは皆さん第14話ご覧ください!」

「くるやい」

雲仙目線

「・・・・・・・・ケツ！風紀委員会特服『スノーホワイト白虎』。」

ダンプにはねられてもへっちゃらだっつー触れ込みの対圧繊維で縫製された最新科学の産物だ。

けど、重くて動きづらいのが難点だ！」

「・・・・・・・・しかし、それにしても思ってたより被害が小せえな。そりゃ校舎全壊とまではいなくても。この辺一帯消えてなくなっ
てても

よかったはずなんだが・・・・・・・・ん？」

オレは床に落ちている火薬玉を手にとった。

（不発弾・・・・？いやオレが管理してんだぜそれはありえねえ・・・・
じゃあ？）

オレは先ほどのことを思い出した。

（ああ、なるほどね。あの女手近にあった花瓶の水を
ブチ撒けて着火直前に火薬玉をいくつか濡らしやがったのか）

「火イつける前に水びたしにされちゃー不発にもなるわな。
そして、窓ガラスが不自然な割れ方をしているぞ。どうやら、
溶ける前にすでに割れたみてーだな。爆破の瞬間蹴り出された火薬
玉も

相当数あるってわけだ。一瞬の判断でよくそこまで動けるもんだぜ。

けどまあ、そんなの所詮は焼け石に水……！？」

「な、何イ……！？」

（五人とも無事だとお！？いや、そんなことより！

なぜあの三人は無傷なんだ！？なぜ神城真夜はあんなに大怪我して
いるんだ！？

神城真夜は何をしやがった！？こっちだってそれなりに命張ったん
だぜ！？）

「黒神！神城！テメーら一体何をした！？」

「……私はただ耐えたただけだ」

「そうですね、俺は善吉たちの痛みと怪我を俺が
肩代わりしただけです」

「それがテメーの能力か！？」

「さあ、どうでしょう」

（こいつやっぱり異常じゃねえか！？）
アブノーマル

「ケケケケケ！いや本当にスゲーわおめえら！その聖者っぷり気持ち
悪いーっ！」

「ケケケ！それでアレだろ？この期に及んでもどうせテメーは争う
理由

なんかねえーって言うんだろ？仲間もオレも傷つけずにすんで一件
落着！

めでたしめでたしハッピーエンドってことになるんだよねー！」

「うるさい」

「!?!」

「……哀れなことだ貴様もかつては人の善性を信仰する心優しい美少年だったに決まっている情状酌量に値するだけのきっかけが

あつてそのような残虐無比な性格を帯びてしまったとしか考えられん

しかし!だからと言って私は貴様を許さない!!」

オレは黒神に睨まれて後ろにとびのいた。

(な……!?!?ビ……ビビらされた?オレが!?睨まれただけで!凄まれただけで!思わず後ろにとびのいちまったってのか!?)

「雲仙二年生貴様の言う通りだ私と貴様はそっくりだよ私も貴様と同じで自分を正しいと思ったことなど一度もない。

もっといい方法はなかったか。ちゃんと他人の役に立てているか。起こりうるすべての可能性を考えたか。誰かの悲しみを見落としていないか。

気づかぬうちに易きに流されていないか。人を助けることに慣れてしまつてはいないか。

いつだって迷っているしいつだって怖い。

私は正しくなんかいただ正しくあろうとしているだけだ!!」

「?わかんねーよ何言つてんだかおんなじじゃねーかそんなの」

「わからんか？私は貴様の言うような大層な信念などないと言っておるのだ。少なくとも友達を危険な目に遭わせてまで貫きたい信念などない！！」

真夜目線

うわぁ、黒神めだかの真骨頂その？『乱神モード』

あのめだかちゃんとは戦いたくねーぜ。

それにしても、『友達を危険な目に遭わせてまで貫きたい信念などない』か

・・・俺なら言えないな絶対に。

「うつ・・・何が起きたんだ？」

お、善吉たちが起きた。

「お、善吉たち怪我してないか？」

「ああ、大丈夫だ・・・ってどうしたんだ、真夜大怪我してるけど大丈夫か！？」

「ああ、大丈夫だぜ」

「それより、俺たち三人はあの爆発で無傷なんだ？」

「人吉くん俺たちが無傷なのは真夜くんがなんらかの能力を使って俺たちを助けてくれたんだよ」

「違いますよ阿久根先輩。俺は何もしてませんよ。」

「私の聖者っぷりが気に入らないんだって？雲仙二年生いいだろう

ならばがっかりさせてやろう！私が怒りに任せて暴れてしまつようなただのくだらない人間だということを教えてやろう！！」

「人吉くん、めだかさんがあの状態になるのはいつ以来だ？」

「・・・・・・中一の夏休み以来ですよ。だから三年ぶりですか」

「そうかい。そうだな。俺もあの頃はめだかさんのことを、血も涙もない理想主義者だと思っていたよ」

「・・・・・・黒神めだかの真骨頂その？『乱心モード』！

こうなつたらもう俺でもとめられねーよ。雲仙お前終わったぜ」

まあ、雲仙じゃめだかちゃんみたいな化物に勝てるわけないか。

「・・・・ケケケ！人のコト勝手に終わらせてんじゃねーぞ、ボケ！！乱神だろーが！魔神だろーが！火山の前じゃ消し炭だぜ！！」

あ、雲仙がスーパーボールを持ったままめだかちゃんに突っ込んで思いつき殴られた痛そー。

「ガ、ガハッ！」

「ダンプにはねられてもへっちゃらな制服だつて？

それを聞いて安心した。つまり、三発までなら大丈夫ということだよな私が本気で殴つても！！」

「うるさい」（後書き）

作「ふう、疲れた」

神城「お疲れ様（棒読み）」

作「あともう少しで、風紀委員会編も終わりか」

神城「そうだねー」

作「それでは、皆さんさようなら」

「やり過ぎだ」(前書き)

作「夏もどんどん暑くなってきましたね」

神城「そうですねー」

作「セミとかも鳴き始めてきましたね」

神城「そうですねー」

作「どうしてそんなに神ちゃんはテンションが

低いわけ？」

神城「暑いからだよ。そろそろ始めなくていいのか？」

作「そうだった。それでは皆さんご覧ください」

「やり過ぎだ」

ドゴオオン！！

うわ、雲仙の奴、壁に吹っ飛びやがった。

「たいしてダメージがあるとは思えないが
そのまま立ち上がれない振りをしておけ。
今ならまだ許してやるかもしれん」

「・・・ケケケ冗談！痛くも力ユクもねーっつーの！
ノーダメージだよボケ！」

そのまま、立ち上がれない振りしればいいのに。

「そうかあくまでも戦争を選ぶか、私も同じ気持ちだが、
ならば私の理性がわずかでも残っておるうちに忠告しておこう。
私はあるとあらゆる格闘技の指南を受けておるが、その技術を
貴様相手に使うことはない！」

私はただの衝動的な怒りに任せて暴力に訴え、
人間ではなく獣のように貴様を撃つ！」

「いいだろう！テメーが獣のように戦うのなら！」

オレは人間のように戦ってやる！テメーの大好きな！

オレの大嫌いな人間のようにな！！

そして、黒神めだか！

正しい正しくないにかかわらず正義は必ず勝つんだよ！！

（とは言え屋外に飛び出してきちまったのはマズかったな。

オレの武器は基本屋内用！ひらけた場所じゃ威力も効果も半減だ！だからあえて黒神のパンチをあえて喰らう）」

雲仙はめだかちゃんのパンチを喰らって生徒会室にぶっ飛んだ。

「ぐ……ぐふうっ！」

「……どうやら何か企んでいるらしいな。しかしまあ、とどめを刺さずにいられる気分でもないが」

「めっ……めだかちゃんっ！」

「……私の主義に巻き込んで悪かったな貴様たち。あとで腕章を返してくれ。これから私は一人でやっていくことにするよ」

「……！」

めだかちゃんが言った言葉に驚く善吉。

「私を校舎内に誘い込むのが貴様の策か？」

だとすれば小賢しい小細工だな。貴様はこの程度か

雲仙二年生！」

「はっ……！ナメてんじゃねエぞ！オレはな箱庭学園の十三組で一年以上生き延びてきてんだ。入学してたかが数ヶ月のテメーとは違うんだよ……！」

そついうと雲仙はスーパーボールを投げつける。

「攻撃される理由はもうあんだろ！それでもオラ！避けれるもんなら避けてみる！！」

「全方位からの弾幕攻撃か。ふむ確かに避けるのは難しそうだが」

そのまま、めだかちゃんはスーパーボールの中をガードもせず進んでいく。

「最初からあえて喰らうと決めていれば我慢できないことはない！私の主義と貴様の正義！これで決着だ雲仙二年生！！」

すると雲仙はなぜか笑っていた。

「ああ、確かに決着のようだぜ。テメーの負けだよ黒神めだか！」

すると、めだかちゃんのパンチが途中で止まった。

「！？」

「いきなり動けなくなつてびっくりしたか？」

そして、さっき投げたのはスーパーボールでも火薬玉でもねえ。

こいつはオレの最後の切り札『スティングボール鋼糸玉』だ！

一度使ったら二度と使えない奥の手だけだな。

当然ただの糸じゃねえ商品名『アリアドネ』！この防護服『スノーホワイト白虎』を縫製してんのも同じ糸だぜ。

一本で五トンの重量を吊り下げられるアホみてえな最新の科学技術だ！

これが、オレ様名物『霞網』！見たか聞いたか感じたかア？
これが人間の知恵って奴だよ獣！！」

「見えない糸で雁字搦めにして身動きが取れぬよう拘束するまさしく貴様のやり方だな風紀委員長」

「ケケケ！そーだよその通りだよ！

これがオレのやり方で、これがオレの正義だよ！

糸で縛り、網で捕える！！

もう一度言ってやるぜ黒神！

正しい正しくないにかかわらず正義は必ず勝つんだよ！」

「ふむ、ならば私ももう一度言おう。

小賢しい小細工だな貴様はこの程度か！！」

めだかちゃんは足から血が出るのもかまわず歩き始めた。

「なっ・・・！？何やってんだテメー！その細さの！

その強度の糸は刃物と変わらねーぞ！？八つ裂きになりてーのかボケ！！」

「糸で私は縛られない。網で私は捕えられない。

八つ裂きになら既にされている。雲仙冥利！

貴様は私の心を引き裂いた！！」

ゴゴゴゴゴ・・・

「なっ・・・なんだこりゃあ・・・！？

一体何が起きてやがる・・・！？」

「貴様の糸がいかにも頑丈であろうと、その糸を結んだ校舎の方はそうではあるまい。身動きがとれんというほどでは実にないぞ」

「はあ！？ふざけんなコラ！そんなの！
校舎を引きずって歩くようなもんじゃねーかよー！」

「私は生徒会長だぞ！学園校舎の一つや二つ、動かせんわけがなかるうが！！」

「・・・なにあれ？一体何が起こってるの？」

そういえば、喜界島は『乱神モード』を見たことないのか。

「決まってるだろ。めだかちゃんが怒ってたんだよ」

「そういえば、会長さんが言ってたけど腕章を返してくれて言っただのはおそらくこの先も周りを巻き込んでいくからだろ」

「ああ、真夜の言う通りだ。引き際があるとすれば多分ここだぜ。
あいつにこれ以上巻き込まれたくないんだ。たら今が生徒会の辞め時だ」

「「！？」」

「情けねえ限りだが、オレにはもう何も残っちゃいねえ。
しかしな、黒神それでもオレはテメーに負けちゃねーんだ。
なぜだかわかるかい？それは、テメーはオレを改心させることが
できなかった！それはテメーにとっちゃあ敗北だろ？」

テメーは確かにオレより強かった。でも、他のすべてを手折られようと、オレは信念を曲げやしねえ。

オレは明日から何も変わらずこう言い続けるぜ。

オレは人間が大嫌いだ!!」

「そうか。私は人間が大好きだ。貴様は改心しなくていいよ。貴様に明日は来ないからな!」

めだかちゃんが拳を雲仙に振り下ろそうとした瞬間……

「やめろめだかちゃん。やり過ぎだ」

拳が振り下ろされる前に、善吉たちがめだかちゃんを止めた。

「離せ貴様達。巻き込まれたいのか」

「うんそうだよ。あたし達は黒神さんに巻き込まれたいんだ!」

「めだかさんになんと言われようと、俺達は生徒会を辞めません」

「……めだかちゃん。

俺達は今二度と、お前を一人にはしないよ」

善吉がそう言うと、めだかちゃんは元に戻った。

「雲仙二年生。貴様、生徒会に入らないか？」

「……あ？」

「もとより副会長には敵対者な者に就いてほしかったのだ。不知火には断られてしまったが」

「普通敵対者を副会長にしますか？」

「……つぎっけんな！オレは風紀委員長だぞ！？誰とでも仲良くできると思ってんじゃねーよボケ！！」

「……そうか残念だ」

「じゃあ、俺も雲仙先輩とあの計画のお話でもするか。」

「大丈夫ですか雲仙先輩？こんな大怪我したらあの計画から抜けるしかありませんね。」

「そうだ！俺が雲仙先輩の代わりに入りましょうか？」

「！？テメーなんであの計画の事を知ってやがる！」

「さあ、何故でしょう」

「おい、真夜病院行くからお前も来い」

「じゃあ、俺呼ばれているので」

俺は善吉たちと一緒に病院に行った。

まあ、こんな怪我すぐ治るけど。

く？sideく

「雲仙くんがしばらく戦線離脱ですか。

困りましたねえ。『十三組の十三人』は一人でも

欠けちゃダメなのに。このままでは私の計画が破綻して
しまいますよ。どうすればいいと思います？袖ちゃん」

「どーもこーも！別に悩む必要なんかないって。おじいちゃん。

いやさ、箱庭学園理事長不知火袴総帥！困った時は迷わず選ばず
目安箱に投書すればいいんだよ」

「そうですね。それにしてもまさか、神城くんが

^{アブノーマル}
異常だなんて驚きましたよ。

もしかしたら神城くんは黒神さんより異常なのかもしれませんね」
^{アブノーマル}

「そうだね。あたしは気に入っているよ。真夜のこと」

「やり過ぎだ」(後書き)

感想等お待ちしております。

そして、ただいま神城真夜の験体名を募集します！
それでは皆さんさようなら

「俺は辛くも悲しくもありません」(前書き)

作「皆さん、こんにちわ」

神城「こんにちわてか、投稿遅くないか？」

作「まあね。それでは皆さん16話ご覧ください」

「俺は辛くも悲しくもありません」

こんにちワン！

神城真夜だ。俺は今放送で

理事長室に呼ばれめだかちゃんと

一緒に向かっているところだ。

まあ、呼ばれた理由はわかるけどね

理事長室

「雲仙くんとの小競り合いは大変でしたね

黒神さん。

理事会も彼の正義には手を

焼いていたものですから、正直言つて助かりましたよ。

箱庭学園理事長として正式にお礼を言わせてください」

「例には全く及びませんよ。不知火理事長。

それより私としてはお孫さんの制御を

お願いしたいものですな。恥ずかしながら彼女には

してやられっぱなしでしてね」

「ははは。無茶を言わないでくださいよ黒神さん。

袖ちゃんをコントロールできる人間なんて精々

君の幼なじみの人吉くんくらいでしょう」

「……確かに」

そろそろ、この世間話を終わらすか。

「それで、理事長は何か俺たちに話があつて呼んだんですね？」

「黒神めだかさん、それと神城真夜くん。君たちに折り入つてお願いしたいことがありますね」

「それは怖いですな。あなたはあのお孫さんのご祖父でいらつしやる。どんな無理難題をふっかけられることやら」

「まあそう構わないでくださいよ。なあに簡単なお願いなんです。実は雲仙くんは風紀委員会としての活動とは別に私の主宰するプロジェクトに参加してくれていましたね。

ただ彼は、今度のことですばらく静養しなければなりません。そこで黒神さんと神城くんに彼の代役を務めていただきたいのです」

「プロジェクト……ですか？」

「ええ、私は便宜上それを『フラスコ計画』と呼んでいます」

てか、『フラスコ計画』で名前おかしいでしょ。

「黒神さん。それと神城くん。君たちはどうして自分が優秀なのか疑問に思つたことはありませんか？」

「……質問の意味をはかりかねますね。そもそも私は自分を優秀だなどとうぬぼれたことを思つてはおりません」

「俺も自分を優秀と思つたことはありませんよ」

「ははは、謙遜することはありませんよ隠さなくたっていいんです。」

君たちは明らかに異常なんですから！」

「……これは随分と買いかぶられてしまったものですな。私の為すことなど恵まれた生まれにおけるただの鍛錬の結果に過ぎませんよ」

「そうですね。優秀な人間ほど己が優秀さを努力や運や環境のせいにしたがるものです。」

まるで言い訳でもするみたいだね。では、黒神さんと神城くん。ここでひとつ老人の実験に付き合っていただけませんか？」

そう言うのと袴理事長が俺とめだかちゃん目の前にサイコロが8個入ったグラスを置いた。

「理事長このサイコロを投げればいいんですか？」

「はい、そうです」

俺は何も考えずサイコロを投げた。

そしてめだかちゃんの方を見るとそこにはサイコロ全てが積み重なっていた。

「すいません。昔からこうなんです。私がサイコロをまとめて振ると、なぜか、こんな風に積み重なってしまうのです」

「……いえ、それでいいんです。」

それでこそ・・・君を誘う価値がある！」

袴理事長がそう言ったあとに俺の方を見る。

「どうしたのですか？神城くんサイコロは？」

「ああ、サイコロはあれですよ」

俺が指さす先には、何かが粉々になった物が、八つあった。

「まさか！？」

「なんか俺が投げたらサイコロが粉々になっちゃいました」

「話は戻りますが『フラスコ計画』の定員は十三名。
本来一年生のうちはこのプロジェクトには参加できないしきたり
なのですが。」

雲仙くんを退けたあなたには十分な資格があるでしょう。
勿論、計画参加者にはそれ相応の報酬が用意されて」

「不知火理事長お話はそこまで結構です」

「おお！では黒神さん！」

「いえ、申し訳ありませんがここで正式に
お断りさせていただきます。私は見知らむ他人の役に立つために
生まれてきました。私のささやかな能力の裏打ちはそれで十分です。
そして、天才などいないというのが私の持論であり、
そのプロジェクトはそんな私が協力できる類の計画ではないでしょ

う。

雲仙二年生をリタイアさせてしまったことは別の形で償わせてください。

では、失礼します。ほれ、真夜も行くぞ」

「会長さん、俺少し袴理事長と話があるから先に行つといてくれ」

「そうか・・・わかった」

めだかちゃんが理事長室から出ていた。

「それで神城くんは私に何の用があるんですか？」

「『フラスコ計画』の話なんですけど俺、参加してもいいですよ」

「本当ですか!？」

「本当ですよ」

なんでこんなにビックリするのかなー？

「何故、『フラスコ計画』に参加しようと思つたんですか？」

「何故、ですか。理由は簡単ですよ友達がいるからです。久しぶりですね！名瀬先輩と古賀先輩。あと、袴理事長の後ろにいる四人もばれてますよ」

俺がそう言つと袴理事長の後ろから六人の異形が現れた。

「なんだよ、気づかれてたのかよ。
てか、真夜、普通の^{ノーマル}お前がなんで

『フラスコ計画』に参加するんだよ」

「たしかに真夜くん。たしか中学の時真夜くん、普通^{ノーマル}だったよね？
まさか！私みたいに改造人間になったの？」

「いやいや、古賀先輩と一緒にしないでください。
俺は改造なんてしてないですよ」

てか、古賀先輩あなたはいつからそんな露出狂に・・・

「神城くんは古賀さんと名瀬さんとお知り合い
だったのですか」

「はい、あと王土先輩と行橋先輩は一度会っています。
あとの二人は今日初めて会いました。初めまして神城真夜です」

「俺は三年十三組の高千穂仕種だ。そして、験名は『棘毛布^{ハードラッピング}』だ」

「僕は三年十三組の宗像形だ。験体名は『枯れた樹海^{ラストカーペット}』だよ」

「真夜くん、『フラスコ計画』に入ったら黒神さんたちとは
敵どうしになってしまいますよ？」

「そうですね。俺が会長さんたちと敵どうしになったら、
会長さんたちはショックを受けると思いますが
俺は会長さんたちと敵どうしになっても俺は辛くも悲しくもありま
せん」

「そうですか。それでは改めて神城くん『フラスコ計画』に参加しますか？」

「参加させていただきます。それじゃあ俺はもう帰りますね。
あと、俺の参加する報酬は雲仙先輩が使ってた部屋をください」

「わかりました。あと、神城くんの異常性を教えてくれませんか？」

「名瀬先輩。俺は只、中学性の時自分の異常を隠してただけですよ。
そして、俺の異常は『^{アブノーマル}物真似^{コピー}』です。
相手の異常を使うことができます」

まあ、過負荷も使うことできるけどね。

「今日はどうもありがとうございました。もう、帰ってもいいですよ」

「わかりました。それじゃあ、俺は帰りますね。

名瀬先輩。古賀先輩さようなら」

俺は理事長室を出て、家に帰った。

（^{アブノーマル}袴side）

「これは黒神さん以上の異常が『^{アブノーマル}フラスコ計画』に参加したかもしれませんね」

「俺は辛くも悲しくもありません」(後書き)

投稿するのが遅れると思います。

なるべく早く投稿しようと思います。

それでは、感想等お待ちします。

「見せてもらいますよ」(前書き)

作「皆さん、投稿するの遅くなってすいません」

神城「なんで、遅くなっただんだ？」

作「験体名を考えるのに時間がかっちゃって、

けっこう験体名考えるの難しいな」

神城「おい、そろそろ始まるぞ」

作「そうだった。それでは皆さん第17話どうぞ」

「見せてもらいますよ」

ヤッホー」神城真夜だ。

俺は今、理事長に呼ばれ理事長室にいる。

「神城くん、あなたを呼んだのはあなたの部屋の模様替えができたからです」

「本当ですか」

どんな部屋になったのかな見に行くのが楽しみだ

「はい。今から見に行ったらどうです？」

「あとで見に行きます。そういえば、今頃王土先輩が会長さんに『フラスコ計画』について語ってるでしょうね」

「そうかも知れませんか」

「でも、会長さんが『フラスコ計画』のことを聞いたら『フラスコ計画』を潰しに来るんじゃないですか？」

「そうかもしれませんがね。でも、黒神さん以上の異常なアフノーマルあなたがいるから大丈夫でしょう？」

「俺が、会長さんに勝つなんて無理ですよ。

それじゃあそろそろ、俺の部屋を見に行きますね。」

「そうですか。あと、あなたの験体名が決まりました。」

あなたの験体名は『道化師^{クラウン}』です」

「俺の験体名決まりましたか。じゃあ、俺は自分の部屋に行きますね。会長さんたちが『フラスコ計画』を潰しに来たら俺は、会長さんたちと行動するって『十三組の十三人^{サーティン・パーティー}』の皆さんに言つといてください」

「『十三組の十三人^{サーティン・パーティー}』の皆さんには言つときますが、どうして、黒神さんたちと行動するんですか？」

「会長さんたちと行動する理由は俺の異常『物真似^{アブノーマルコピー}』で、『十三組の十三人^{サーティン・パーティー}』の能力をコピーするためですよ」

「わかりました。皆さんに伝えておきますね」

「ありがとうございます。それじゃあ、俺はもう行きますね」

俺は理事長室を出て、すぐ時計台の地下に向かった。

「「いらしゃいませ」」

そこには左右対称に立っている兄弟がいた。

「君が新しく『十三組の十三人』に入つた人だね」

「はい、俺は神城真夜て言います」

「僕は、二年十三組の対馬右脳だよ」

右側に立っている右脳が神城に自己紹介する。

「僕は、二年十三組の対馬左脳だよ」

左側に立っている左脳が神城に自己紹介する。

「「ところで、君は何しに此处に来たんだい？」」

「自分の部屋を見に行こうと思つて来たんですよ」

「「まあ、行けばいいじゃないか。でも、この『拒絶の扉』を通ることができればね」」

「なんですか『拒絶の扉』って？」

まあ、知ってるけどね。

「『拒絶の扉』は6桁の暗証番号を正しく入力すればこの扉はあっさり開く。

一度に通れるのは一人ずつ！一人通るたびに番号は変更される！通れる確率は百万分の一！百万人に一人しか通さない！

ゆえに拒絶の扉！逆に言えばその程度の確率もクリアできない人間は『フラスコ計画』にかかわる資格がないということさ！」

「困ったなー。百万人に一人しか通さないか、俺通れるかな？まあ、勘でやってみるか」

適当に番号を打つと、扉が開いた。

「「なっ！？」」

「適当にやったのに開いちゃった。それじゃあ、対馬先輩門番がنبあってください」

よし、『拒絶の扉』も通ったし自分の部屋行くか。

地下十一階

「此処が俺の部屋か、あまり物が置かれてないな」

俺の階は部屋の色が白で白い机に白いイスが置いてあったただけだった。

「まあ、いつか部屋さえあればいいし。そろそろ、めだかちゃん達も来るだろうし一階に戻るか」

俺は階段を上つて一階に戻った瞬間に、『拒絶の扉』が開いて、めだかちゃんの声が聞こえた。善吉たちも来てから姿を出すか。

「善吉、中で待っておるからさっさと来い貴様ならこの扉を開けられる。キャッシュカードの暗証番号でも押すノリで押せばよい。

なにせ貴様はしし座の生まれであろう？今朝テレビで見た、今日の運勢はしし座がダントツの一位だったぞ！」

めだかちゃんがそう言って何分したあとに喜界島が来て、そのあとに善吉たちが来た。よし、そろそろ出るか！

「よお、会長さんたち！」

「真夜！何故お前が此処にいる？」

「何故って、それは会長さんたちが『フラスコ計画』を

潰すって噂で聞いたから俺もついて行くことにしたんだよ」

「そうか、真夜ありがとう」

「気にすんなよ会長さん！それより、早く行こうぜ」

「そうだな」

俺たちは、地下一階に向かった。

地下一階

「会長さん俺たちさっきも此処来ませんでした？」

「・・・どうも私達はさっきから同じルートをぐるぐる回っておるようだぞ」

俺も此処に来たときにけっこう迷ったな。

「え・・・？そんな馬鹿な・・・？」

「あ！でも、あそこの壁の亀裂見覚えがある！！」

「クスクス！その通りだよ！きみ達は今回ついて、きみ達は今迷っているのさ！この地下一階フロアは迷路・・・否！迷宮になっているのさ！後悔しても後戻りさえできないぜ？さあ、どうするのかな生徒会の皆さん！！」

「・・・お前らなんでついてきてんの？」

「エラソーに言って一緒に迷ってるよね」

「きみ達が扉ブツ壊したから門番の仕事がなくなっただろーが！！」

「僕達も中に入るのは初めてなんだよ！！」

「対馬先輩、人のせいにしたらダメですよ！」

「僕達は事実を言っただけだ！！」

「この先輩からかうの楽しいな」

「どうするめだかちゃん？迷路って確か攻略法があるんだよね？」

「左手法とかのことか？しかし、ああいうのは実際的に迷路を攻略する際には効率が悪いな。それより喜界島会計ここはあの手でいい」

「え・・・どの手？」

「こないだ二人で遊園地に行った時、迷路アトラクションで使ったあの手だよ」

「ああ、あの手！」

「え！？お前ら二人で遊園地とか行ってるの！？男子も誘えよ！俺達は全員揃って生徒会だろ！？」

あれの事が、イヤホンつけとこ。

「あれ？なんで、真夜はイヤホンをつけるんだ？」

「あとで、その理由がわかるさ」

「でも、黒神さんあれあとでこっぴどく怒られちゃったんだけど・・
」

「構わん私が許すやれ」

「・・・うんわかったじゃあ」

そう言つて喜界島が大きく息を吸う
くるぞ！！

「あん！！！！！！！！！！」

「フーツ」

俺はイヤホンを無言で取った。

「な、なななな、なんちゅう声を出すんだ！お前は人間アンプリフ
アイヤーか！

鼓膜どころか心臓が破けるかと思ったわ！！あと、真夜なんで教え
なかった！」

「なんか、ノリで（笑）」

「そう怒鳴るな貴様達、今のでこのフロアの構造は概ね把握できた
ついて来い！最短距離で階段まで行くぞ」

「は・・・はあ？」

「ソナーの原理だ。コモリとかと同じ要領でつまり音の反射で会長さんは迷路を攻略したんだよ。あと、善吉そろそろ喜界島のほつたを引っ張るのをやめる痛がつてるぞ」

そのまま、めだかちゃんたちが階段に向かおうとした瞬間・・・

「テレビアン！ここ、最初のフロアだから色んな奴が通って行くんだけどよ

そんな方法で迷路をクリアした奴はいなかったぜ！」

「「「「！」「」「」

「ただまあ階段まで最短距離で行くとかつれねーこと言うなよ。あ！俺、三年十三組の高千穂ってんだけど！」

ダッ！

高千穂先輩の紹介が終わると善吉と阿久根先輩が殴りかかったが・・・

「「！？」」

善吉と阿久根先輩の攻撃は簡単に避けられていた。

「折角視察に来たんだゆっくり見学していけや。理事長からもオマエラを歓迎するよう言われてんだよ！」

「歓迎？実験の間違いであろう貴様の顔にも見覚えはあるぞ
理事長室で私にちよっかいを出そうとしていた男だな」

「ちよっかい？ちよっかいっつーのはもしかして
こういうことかい？」

高千穂先輩がそう言った後にめだかちゃんがつけていた
髪留めとめがねを握っていた。

「改めて自己紹介させてもらうぜ黒神めだか

サーティン・バー英ドラッキング

『十三組の十三人』棘毛布たぬの高千穂仕種。戦闘科学担当だ
ここを通りたくば俺に実験たぬされてからにしろ！」

「……よからう高千穂三年生。貴様の実験に協力してやる
私も丁度ヴァージョンアップした私を試してみたかったところだ！」
見せてもらいますよ、高千穂先輩あなたの異常を。

「見せてもらいますよ」(後書き)

作「夏休みになっただけ、宿題が多くて無理だ」

神城「お前、宿題とか計画的にやればいいだけだろ」

作「無理に決まってるだろそんな俺はバカだから、宿題とか無理だし」

神城「もういいよ。それでは皆さん感想等お待ちしています」

「増えるのではなく」(前書き)

作「夏休みの宿題が多い」

神城「お前そんなに高校行けるのか？」

作「わかりません」

神城「ダメだこいつ、それでは皆さん18話ご覧ください」

「増えるのではなく」

「いいだろ、貴様の実験に協力してやる高千穂三年。私も丁度、私を試してみたいと思ったところだ！」

「テレビアン！さっすが完全生徒会長！
気風のいい女じゃねえかよこの野郎！」

高千穂先輩は突然、首からネックレスにかかった
USBメモリを取り出した。

「まずは教えといてやるぜ黒神。このネックストラップの
先についてるUSBメモリ、このちっぽけな記録媒体に
フラスコ計画における俺のこれまでの研究成果がすべて詰まってい
る」

「高千穂先輩からそのUSBメモリを力ずくで
奪えば、会長さんの目的が十三分の一達成されるってわけですか」

「そうゆうことだ」

「だが力ずくが簡単だと思ったら大間違いだ！」

「同感だな」

めだかちゃんと高千穂先輩がボクシングスタイルで構えた。
けど、高千穂先輩はボクシングスタイルじゃないんだよねー。

バゴッ！！

「なっ・・・！？しっ、真空跳び膝蹴りい！？」

高千穂先輩がめだかちゃんの顔面に
真空跳び膝蹴りをきめた。

「おおーっと！言ってなかったっけ？
俺の戦闘スタイルはボクシングじゃねえ。キックボクシングだ！」

「・・・騙しかよ！なんて卑怯な！！」

善吉、戦いに卑怯も汚いもないぜ。

「・・・言っではおらんが別に聞いてもおらんな
そして善吉、発言に気をつけるがよい。

この程度の行為を卑怯と呼んでは鍋島先輩に笑われるぞ！」

「うまい！ヘッドバッドで相殺した！それでこそ黒神さん！」

「・・・ケツ！だったらこれはどーだ！？」

そう言っつて、高千穂先輩はめだかちゃんのコメカミを
蹴り抜こうとしたが、めだかちゃんは高千穂先輩の蹴りを
避けようとも見ようともしない。

ドガァ！！

「めっめだかちゃん！！」

「・・・やれやれとんでもないキツクだ。変態の指南あにきを受けていなければ首から上がなくなっていたよ。

ヴァージョンアップしておいて正解といったところか、そしてUSBメモリはいただいた。私の勝ちだな高千穂三年生！」

「ふふんっ！ありえないほどアブノーマルだぜ黒神！俺が留守にしていたらあるいは地下四階くらいまでは

行けたかもしれないーな！！しかし、ついてねえことに俺は

『十三組サティン・パーティーの十三人』最強の男高千穂仕種だ！
恥じることはねえ！運が悪かったと諦めな！！」

「・・・言っている意味がよくわからんな。私の運はむしろよかつたのではないか？見ての通り研究データも手に入れたし・・・

」

「！？」

いつの間にか高千穂先輩はめだかちゃんが持っていたUSBメモリを奪い返していた。

「なっ・・・！いつの間に！？」

「・・・それでこそ選ばれしパーティー『十三人』高千穂仕種ぼくたち門番なんかとは格が違えば、核も違うや」

「こーんないガタイしてっから誤解されがちだけど、俺の本職はあくまで研究者なんだな。研究データは命より大事なんだ悪いがこいつは返してもらっぜ。

これは言ったる？力づくってのは簡単じゃ・・・」

めだかちゃんが笑顔だった。高千穂先輩を同格以上と認めて喜んでいる。

「ふむ！その身のこなし！確かに貴様は最強だ！しかし依然として私の運はいい。最初に会った十三人^{メンバー}が最強だというのはすごくいい！つまり、私が貴様を力づくでねじ伏せることができれば、

今後階層を下るにあたって肉弾戦に関する不安がなくなるということだからな！」

前向きだなめだかちゃん。

「いずれにせよ貴様そのものを攻略しない限り、そのUSBメモリは入手できないというわけだ。いやあ、困った困った。

ではさしあたって！貴様の^{アブノーマル}異常性とやらの正体を解明してみるとするかな！」

「あれは！雲仙先輩が使ってた対人兵器の超躍弾^{スーパードール}！？」

「そう！こんなこともあるのかと勝手に拝借してきた雲仙二年生の私物だ。無論奴と違って私では、これだけ大量のボールの反射を計算することなどできないがな！！掛け値なしの乱反射弾幕！すり抜けてみせる高千穂三年生！」

「四方八方から超スピードで迫り来る超躍弾^{スーパードール}！確かにこれは単なるフットワーク
なんかじゃ避けきれない！」

だが、高千穂先輩はすべての超躍弾^{スーパードール}を紙一重で避けた。

「……っ！あれだけの量の超躍弾を
全部紙一重で避けやがった！どんな速さなんだよあいつ！」

「いや善吉それは違うぞ、今のでわかった。速さではない素早さだ。この男考えて動いていない。あれだけの乱反射を全て計算することなど

それこそ本家本元！雲仙二年生でもない限り不可能だ。それをこの男は

実に機械的に実に自動的にかわしてみせた。

つまり、こやつの動きの正体はズバリ反射神経！！」

「ご名答！俺は生まれつき異常で過剰な反射神経の持ち主でな
言うなれば自動操縦オートパイロットの戦闘機だ。コンバットブレン

どんな機関銃を搭載しよう！操縦桿握ってるお前じゃ撃墜でき
っこねーんだよ！！

だが、俺にもなーんとかわりかけてきたぜ？お前の完全さの秘
密ってやつがな！」

「ほう、それはとても恥ずかしい」

「めだかちゃんアレだ！分身！あれならそいつの反射神経に
対抗できる！！」

善吉がめだかちゃんに提案した。

「……分身？何言ってるんだあいつ？」

「愛すべき幼なじみからの折角の提案だ。
とりあえず試してみるとするか」

「おいおいお前らマジで言ってるのか？分身とか！どこの風魔一族だよ

テメーは！」

「甲賀卅谷だ」

そう言うとめだかちゃんがフエイントの嵐をする。

俺は甲賀より風魔一族だな（笑）

「いよっし！分身の術もといフイントの嵐！あれなら！

スパーボール

超躍弾の乱反射と違って直前までどれに

反応していいかわからないはず！！」

「なるほどびつくりしたぜ。だが、俺がするのは反応じゃねえ反射だよ

どれが本体かわかるのは直前で構いやしねーんだ！

純粹に互感と神経がダイレクトに接続してるんだから錯覚とか！

フエイントとか！脳が現象をどうたらえるかなんて関係ねーの♪」

ゴギンッ！！

高千穂先輩がめだかちゃんの手を折った。

「めっ・・・めだかちゃ・・・来るなあああ！！」！？」

善吉がめだかちゃんのとこに向かおうとしたらめだかちゃんのとめた。

「一体一の戦いだ邪魔するな！」

「別にいーぜえ？俺は三人がかりでも俺の反射神経オートパイロットはそんなものかもしれないえ・・・！！」

めだかちゃんの手には高千穂先輩が持っていたUSBメモリがあった。

「・・・嘘だろ。あいつ、自分の腕をへし折られながらUSBメモリを奪いやがった」

「・・・腕一本かそれでフラスコ計画の一端を潰せたとなれば安い買い物だ。

勿論、今度はもう返さないぞ。とはいえ先程のようにには勝ち誇れん頭脳派を謳う貴様のことだ。どうせこれで私の秘密とやらは理解したのであるう？」

「・・・ああ実にテレビアンだ。つまりお前は俺の逆なんだなお前反射神経がないんだ」

「・・・本当なのかい人吉くん？」

「ええまあ概ね正解ですよ」

「自由に肉体のプログラムをいじれるなんて、マジで化物だぜお前！！」

「・・・えらく得意げだがしかしその程度のこと聞かれたら教えてやったのだ。

取り立てて秘密にした憶えはないぞ」

「がっはっは！そーかそーか気前のいい女だ！だが！これで俺とお前の

優劣ははっきりとついちまったな？だってそうだろ？反射神経が
あり過ぎる俺となさ過ぎるお前じゃあ！自動と操作オートマニキュアルじゃあ
その格差は歴然だ！ないよりある方がいいに決まっている！
ない方がいいのは女の胸くらいなもんだぜ！！」

「・・・優劣はともかく決着はもうついたはずだぞ。
データが手に入った以上私に貴様と戦う理由はない」

「いや、メンゴメンゴそれ実は偽物なのよ。こっちが本物！」

「・・・やれやれ、さすがに残り一本の腕まで
失うわけにはいかな」

そう言ってめだかちゃんめだかちゃんは裸足になった。

「阿久根先輩！喜界島！真夜！もっと離れるぞ！この位置だと
巻き添えを食う！！お前らもだ！早くこっちに来い！そんなところに
いたらズタズタになるぞ！！」

「・・・？何慌ててんだあいつ？ハダシになったからなんだって
んだよ

どうせまた分身の術だろ？ばーか！何人に増えても無駄なんだよ！
！」

「いや、今度は増えるのではなく消える」

「あれ？音が、遅れて、聞こえるよ！！」

「かつ……がはっ……！！！」

気が付いたら高千穂先輩はふっ飛ばされていた。すごいなー。

「黒神……てめえ、音より！光より速く動けるのか！？」

「馬鹿なことを抜かすな。人間に、そんなことができるわけなからう
不規則な垂直跳びでタイミングをずらし、貴様が瞬きで目を閉じた
瞬間を

狙って動いただけだ。奪い取るつもりだったデータは触れたら壊れ
てしまったが

まあそれでも結果オーライ。今度は言わせてもらっぞ？私の勝ちだ
高千穂三年生！！」

「……勝負の途中で瞬きなんかするかよ。衝撃波で……
ぼろぼろじゃねーかお前……」

「断じて違うこれは無理な駆動で全身の筋肉が断裂しただけだ！
私は普通の人間だから光の速度では……動け……な……」

めだかちゃん倒れちゃったよ。

「……！めだかちゃん！！大丈夫かめだかちゃん！しっかりし
る！！」

何やってんだよお前は！こんなの腕もう一本折られる方がよっぽど
マシだろうが！！

なんで出っ端から雲仙先輩の時でも使わなかったような自爆技を……

「

「フン、なんだよ……その女死んじまったのかい？だったら俺は

その死体を

解剖でもさせてもらうとするかな！バケモノ女のホルマリン漬け！
壊されたデータと引き換えでもお釣りが来るぜ！！」

「「「！！」」」

高千穂先輩が起き上がった。あんたも十分なバケモノだよ高千穂先輩。

「増えるのではなく」（後書き）

作「夏休みの宿題やる気でない」

神城「ちやつちやつとやれよ」

作「お前バカにこんなものができてるのか!」

神城「やればできるよ」

作「無理だね!」

神城「もうこんなバカほつとこ。それでは皆さんさようなら!」

「めつめだかちゃん!!」(前書き)

作「皆さん投稿遅れてすいません」

神様「どうも、神城さんの代理の神様です」

作・神様「では、19話お楽しみください」

「めつめだかちゃん!!」

「そいつがあくまで研究データを狙ってくれたから助かったぜ。直接俺のボディが狙われたわけじゃねーからなぎりぎり！立ち上がる事ができた！」

まあ黒神フアントムはあくまで移動術フットワークだから破壊力はあくまで副産物的なものだけど、亜音速での衝撃を受けて立ち上がるなんて高千穂先輩は化物だな。

「・・・貴様がそうして立ち上がった以上さっき勝ち誇ったのは取り消そう。しかし、お互いこの有様だ。ここは痛み分けということにしておかないか？」

「ほ、なんだ死んでなかったのかい。だが、半端な決着なんざ冗談じゃねえ！」

生きてるのなら続きを続けるぞ！四の五の言わずに白黒つけようぜ黒神まだか!!」

「・・・研究データを破壊できた以上もう貴様と戦う理由はない。

階下に向けて体力も温存しておきたいしな、それに貴様とてそうして立っているのが

やつとであろう？わかるぞ、早目に保健室へ行った方が身のためだ」

「待て！あ、いやじゃなくて、待って、待ってくださいだ！

戦う理由ならある！黒神めだか！お前がそこにあるだろうが!!
研究データも！フラスコ計画も！今となってはどうでもいい！

俺はお前という化物ともっと語り合いたただけなんだ！お前は違うのかよ黒神！

俺はお前にとって取るに足らないその辺の奴か！？」

「・・・行こうぜめだかちゃん取り合うことねーよ。

俺達には生徒会としての業務があるんだからよ」

「いや悪い善吉、業務の目的とそぐわんことはわかっておるがどうやら自分を抑えきれん、あやつと拳で殴り合ってやりたいと思っっている私がいる」

「・・・めだかちゃん」

まあ、あんなにめだかちゃんと張り合っただからな。

「いいよ、好きにしな。やつちまえめだかちゃん！

階下のことは俺達に任せろ！」

「ああ、任せたぞ。さ！やろうか！」

「おう！ありがとう！」

ドガガガ！！

めだかちゃんと高千穂先輩が殴り合いを始めた。

「う・・・うわあっ！なっ殴り合いいいっ！！」

「めだかさんはともかく・・・高千穂も避けない！だとお！？」

「避けないんじゃないかって避けられないんだろ。あれはいくら高千穂さんが異常な反射神経を持っているといつてもそれはコンディションが万全な状態でこそ生きる異常だ。」

あんなボロボロじゃ神経のスピードに肉体がついていけない互角に殴り合ってるように見えるけどもう決着はついているよ。

「十三人」らしくもない。何をみっともなく執着しているんだか」

[illegible]

急に高千穂先輩が笑い始めた。

高千穂先輩嬉しそうだな！。

「楽しそうだな。私も楽しいぞ。とても楽しい殴り合い、否とても楽しい触れ合いだ。だが、すまんそろそろ私が限界だ終わりにさせてもらっぞ」

めだかちゃんが高千穂先輩にアップしようとした瞬間
高千穂先輩が避けた。

「避けたあ！最後の最後で反射神経！！」

「いや！今のは反射神経だけじゃねえ。反射神経プラス判断力！あの野郎最後の最後までものにしやがった！」

「ははははは！ほら！まだまだ終わらねーぜ黒神……！？」

「・・・だから限界だと言っただろう。反射的に足が出てしまったでわないか」

めだかちゃん」が反射神経をオン・オフできるようになった。

「いい勝負だった。しかし今日はこれでおしまいだ。明日の放課後また遊ぼう！」

「……………へっ、ヤダよ」

「ふう！一時は思うことかと思っただが結局は、いつも通りの展開でいつも通りの結果だったね。とりあえずこれで、ワンフロアクリアだ！」

そういえば次の階は宗像先輩が。殺人衝動はいらないからな？どうしよう？

〈？side〉

『拒絶の扉』に一人の男が立っていた。

「やれやれこりゃあ阿久根くんの仕業だな。荒っぽい真似をするもんだよ全くね！」

男は電子錠に数字を打ち込む。

「さて、地下に潜るのも一年ぶりか別に懐かしくもないや」

電子錠には『OPEN』と書かれていて、男は地下に入って行った。

〈真夜side〉

「・・・え？あれ、なにこれ？俺達、今階段を降りて地下二階に来たんだよな。なのに、なんで屋外みたいな景色が眼前に広がってるんだ？」

「それも日本庭園って言うかなんて言うか」

「・・・庭園というよりこれは一種のビオトープだな。」

迷路に続いている実験施設というわけだ。目的は不明だがこれもフラスコ計画の

一端なのであろう、ほれ天井を見てみるちゃんと屋内だぞ、気圧や光量を調節して

屋外を再現しておるのだ」

「・・・それがわかっているなら早く後ろの扉を閉めてくれないかな扉を開けっ放しにされたら空調が乱れる。環境を一定に保つためにこれで結構苦労しているんだよ」

出たよー宗像先輩。

「それは気付かなかった。ところで、貴様も『十三組の十三人』のメンバーか？」

「そうだよ三年十三組宗像形だ。理事長から聞いている君達が施設を視察に来た生徒会執行部なんだろう？だけど見ての通り僕は今作業中で君達の相手を

してる暇はないんだ。悪いけどこのフロアの視察は後回しにしてくれないかい？」

「え・・・後回しってあなたは私達を通せんぼしたりしないの？」

「ああ、僕は争いが嫌いだし都城みたいに嫌がつてる黒神さんを無理にメンバーに引き入れようとは思わないからね」

「ふむ、まあそういうことならこの階は素通りさせてもらうとするか」

めだかちゃん達が地下三階に向かおうとしたその瞬間・・・

スパッ！！！！

「めつめだかちゃん！！」

宗像先輩が日本刀を取り出し、なんのためらいもなくめだかちゃんの頸動脈から切った。

「めつめだかちゃん!!」(後書き)

神様「なんで、投稿するの遅れたんですか？」

作「それはね、新しく書く小説の設定を考えていたんだよ」

神様「設定は出来たんですか？」

作「それがまだなんだよ」

神様「がんばってください」

作「はい。それでは皆さんさようなら」

「やってみる」(前書き)

作「今日カラオケ行って来たぜ」

神様「何を歌ったんですか？」

作「ボカロ曲だぜ！」

神様「そうですか」

作・神様「それでは、20話ご覧ください」

「やってみる」

スパッ！！

「めっ！めだかちゃん！！」

善吉達は真っ青な顔をしていた。二人を除いて。
当の宗像先輩は……

「ん？あれ、へえ。避けるんだ。避けないって聞いてたのに」

そう。めだかちゃんはギリギリの避けていた。

めだかちゃんが避けることができたのは、高千穂先輩の

『オートパイロット
自動操縦』を手に入れたから

避けたんだけどね。

「なっ……なっ……なななっなんだこいつう！？」

「ああ！驚かせてしまったてすまないね。どこから日本刀を
取り出したのが不思議なんだろう？」

そう言うと、宗像先輩の制服から、人を殺す凶器が複数出てきた。

「ご覧の通り僕は暗器使いでさ、制服中からだじゅうのあちこちに武器や凶器を
隠し持っているんだよ」

「……私達の相手をしている暇はないのではなかったのか？
宗像三年生」

「ああ、うんそう言っただけ信用させた方が殺しやすいそうだったからね。僕は

高千穂と違って戦う人間じゃないからさ、殺す人間だ」

「殺すって……何言っただお前……？」

「別に驚くことはないよ。当然のことさ。彼は人殺しのテクに
アブノーマル
異常なほど長けた、指名手配中の殺人犯なんだから」

「……！？」

「人間を見ると殺すことしか考えられない。生まれついで
ラストカーベット
シリアルキラーそれが彼『枯れた樹海』の宗像形さ！」

「……人を無差別殺人犯みたいに言わないでよ傷つくな。僕は理由なき殺人者じゃない。僕は理由ありきの殺人者だ。」

僕は今作業中だ。だから殺す。

君達の相手をしている暇はない。だから殺す。

通せんぼしない。だから殺す。

僕は争いが嫌いだ。だから殺す。

黒神さんはメンバーに引き入れるつもりはない。だから殺す。

今日はとてもいい天気だ。だから殺す。

昼ごはんがおいしかった。だから殺す。

昨日の夜はいい夢を見た。だから殺す。

楽しみにしていた映画の封切りが近い。だから殺す。

携帯電話の電池が切れそう。だから殺す。

特に何も無い。だから殺す。

……全ての道がローマに通じるよう、僕にとっては

全ての現象が殺人に通じるだけなんだよ」

これって会話が成立してるのかな？

俺はわからないや。

「ちなみに理事長からは君達を絶対に殺さないよう
言いつけられているんだ。だから殺す」

「・・・下がっておれ貴様達、こやつのは相手は私がす」
「駄目だよーんめだかちゃん」

怪我人はおとなしくしなきゃ！」！！！！？？？？」

「黒神さんが一瞬で乱神モードになって！突如登場した
謎の変態を一瞬で退治した！！」

「殺人犯に続いて変態とは・・・すさまじき層の厚さだな」
十三組
サイティン・パーティー
の十三人」

「いや、阿久根先輩よく見てください。あれは変態ですがめだかち
やんの

お兄さんです。真黒さん、どうして真黒さんがここに？」

「愚問だな善吉くん。妹あるところに兄ありさ。妹のピンチを
見学しにこない兄は兄じゃない！」

さすが、アブノーマルアブノーマル異常で変態な真黒さんだ。

「・・・だったら僕の相手は誰がしてくれるんだ？僕は誰を殺せば
いい？」

「やー宗像くん久し振り！僕のこと憶えてる？変態でおなじみ！魔法使いの黒神真黒くんだよーん！」

この人自分が変態って認めてるよ。

「憶えているさ。僕に暗器を覚えてくれたのはお前だからな。お前のおかげで

僕は恐ろしき人殺しから、おぞましき人殺しになれたよ」

おぞましきって何？あとで事典で調べるか。

「ところで！君の相手を誰がしてくれるだっけ？心配しなくてもそんなことは決まっているよ。……行けるね？善吉くん」

「はい。行けます！」

「んっ！よく言った！」

やっぱりこの戦いは善吉がやるのか。そしたら俺また出番ないじゃん！？

「……待ってくださいお兄様！ここはやはり私が行くべき――

――」

「おいおいめだかちゃん。べきとか務めとかお堅いことを言わずに、たまには黙って甘えてあげてもいいんじゃないかい？」

「そうだぜ会長さん。善吉が格好つけてるんだからよ」

「信じてやりなさい。十三年間絶えることなく！化物の隣にいた男おまえ

だよ
」

「女子をかばって前に出るなんてきみはきつと優しい子なんだね。
とても仲良く
なれそうなのがするよ。だから殺す」

「やってみろ限界野郎。俺は殺されたくらいじゃ死なねえよ！」

「やってみる」(後書き)

作「明日もカラオケだ」

神様「遊ぶのもいいですけど、小説も書いてくださいよ」

作「ラジャー！」

作・神様「それでは皆さん、さようなら」

「男を見せるのは」(前書き)

作「どうも、おはこんにちばんわ」

神様「おはこんにちばんわ。そういえば、
小説は進んでいるんですか？」

作「……す、進んでいますよ」

神様「まあ、こんな作者を皆様よろしく願います」

作・神様「それでは、21話ご覧ください」

「男を見せるのは」

「体面上、一応こういう台詞を言っておいた方がいいのかな？
ここを通りたくば僕に実験こうされてからにしろ」

「俺は別にこんなとこ通りたくななかねーさ。ただ通したい意地があるだけだ」

すると宗像先輩が刀を取り出し、善吉に向ける。

「使え。見たところきみは手ぶらじゃないか。僕はたくさん持っているから
貸してあげるよ」

「カツ！ご親切にどーも！けどまあ遠慮させといてください宗像先輩。俺は
こう見えてデリケートな草食系男子でね。人を傷つける武器は肌に
合わないんですよ」

宗像先輩が刀を向けるのをやめ、握る。

「さてと！じゃあ、どうやってきみの命を殺そうかな。ま、とりあ
えず太刀これで
試してみる——かなっ！」

ヒュッ！！

宗像先輩は剣を振り下ろす。

だが、

ガッ！！

善吉のパンチにより、天井へ弾き飛ばされる。

「・・・へえ。太刀^{これ}じゃきみの命は殺せないみたいだね。じゃあ多^こ刀^れだ」

宗像先輩は袖の中から多くの太刀を取り出し、善吉に振り下ろす。

ガッ！！

ガッ！！

ガギン！！

ガッ！！

が、その全てが善吉の蹴りや拳によって天井に飛ばされる。
凄すぎるだろ。

「うおおおおおっ！なんだあの画！宗像先輩の斬撃を全部受け切ってやがる！」

「気持ち悪い！あの一年刃物が怖くねえのか！？」

「あははは！本当デリケートな戦い方をするよね善吉くんは。どれほどたくさんの刃物を有していようと一度に使える数は限られている。だからそれを順番に迎撃する。作戦とし

ては一見真っ当ではあるけどさ。ミスの一つも許されない上に酷く

気長な、千日手みたいな
戦い方だ」

「・・・随分善吉びいきの観戦をされますねお兄様。あなたらしくもない」

「あははは！それは誤解だよめだかちゃん。むしろ僕は善吉くんには
は厳しいぜ？もしも、

ここで彼が宗像くんに殺されるようだったら、やはり善吉くんには
めだかちゃんを守る資格
がなかったんだという判断を僕が下さざるを得ないからね！」

真黒さん厳しいな。

「やるじゃないか一年一組くん。どうやら多刀^{これ}じゃあきみの命は殺
せない
みたいだね」

じゃあ鈍器^{これ}だ」

宗像先輩はハンマーを取り出した。

「・・・・・・・・！！シティハンターの相棒かよアンタ・・・・・・・・！！」

「・・・いや真黒さん。確かに暗器の手際には感動すら覚えますが、
あの宗像先輩って

武器の扱い自体はどうやら素人ですよな？」

「うん。そうだよーさすが阿久根くんよく気付いたね！」

「そりゃ気付きますよ。なぜその辺は鍛えてあげなかったんですか？」

「うーん。できる限りのフォローはしてあげただけど、あいにく宗像くんはそっち方面の才能はなくなつてさ。だけどそれでいいんだよ」

宗像先輩はハンマーをもち、善吉に飛びかかる。

「彼は戦士じゃなくて、人殺しなんだから」

けど善吉は、手で受け止めた。痛そう

「・・・なるほど」

そして宗像先輩はなんの躊躇もなく、武器を地面に捨てる。

「ふむ。よし。大体把握できたよ一年一組くん。ちょっと待たせてしまったけど、ようやくきみの殺害方法がわかった。

きみの命を殺す武器は、狼牙棒^{これ}だ」

てか、狼牙棒ってあんなでかいものをどこに隠してるんだ？

「これなら弾くことも止めることもできないよね。この長さなら僕

のノ口さも十分
カバーできるだろうしさ」

「…………えーっと……今更ですけど宗像先輩。それをお借り
するってありですか？」

「……………なしだ」

そして宗像先輩は狼牙棒を振り下ろした。

すると善吉は素早く服を脱ぎ、当たる前に巻きつけた。

「だったら仕方ないですね。肌に合う服で防御させてもらうとしま
すか！」

ダッ！

ドゴッ！！

善吉は手を離し、宗像先輩を蹴り喰らわす。

「よしっ！凌ぎ切った！」

「やったあ！人吉の勝ちだね！」

「いや！やってないね。むしろやってしまったという感じだよ。今
ので

決められなかったのは最悪と言っていい」

「……………そうか。狼牙棒でもきみの命は殺せないのか。
これ

「じゃあ拳銃だ^{これ}」

「S & W マグナム 44

と

デザートイーグルの二丁拳銃。身も蓋もないほど逸脱した圧倒的
な殺害方法、男を
見せるのはここからだぜ善吉くん！」

「男を見せるのは」(後書き)

神様「そういえば、能力とか考えてるんですか？」

作「難しくて、考えてありません」

神様「がんばってくださいよ」

作「わかりました！」

神様・作「それでは皆様さようなら」

「善吉iiiiiiiiiiiっ!!!!」(前書き)

作「おはこんにちばんわ」

神様「おはこんにちばんわ」

作・神様「それでは22話ご覧ください」

「善吉iiiiiiiiiiiっ！！！」

ダッ！！

銃口を向けられたと同時に善吉は宗像先輩に近づき、

「！！」

手を蹴り飛ばして銃を離れさせ、

ガララ

ガッシャ

銃を一瞬で分解した。

「（この一年拳銃に怯えないどころか拳銃の扱いを心得ているだ
！？」

「別に何も心得ちゃいねーよ。本を読んで仕組みを理解し、日夜モ
デルガンで
練習してるだけだ。

こういうこともあるのかな！」

「なるほど。二丁^{こね}拳銃でもきみの命は殺せないのか。じゃあ多丁
だ」

ガッ！！

善吉は宗像先輩が拳銃を大量に取り出したと同時に近づき、蹴り飛ばした。

「……人吉くんが足技を多用し始めましたね」

「うん。もったいぶっていられるような局面でもないだろうしね。
サバット！善吉くんのベーシックな格闘スタイルだ」

「路上喧嘩を源流とする足技が特徴的なフランスの格闘技ですよストリートファイトね」

「善吉くんは格闘技に一通り手を出してるみたいだけど、極めるならサバット
しかなかったんだろうな。」

「日本じゃ如何せんマイナーとはいえ、確かに一番彼らしい戦い方ではあるよ。」

「なにせ恐ろしく現実的だ。外靴での戦闘を前提とした格闘技なんてサバットをおいて
他にはないからね！」

「しかし、そうは言っても——拳銃相手に一步も引かない
人吉くんの姿勢は明らかに
常軌を逸している。あれはあれで十分に異常ですよ」

「それは違うよ阿久根くん。そんな異常でことば片付けられちゃ善吉くんが報われない。」

「僕がついつい善吉くんに肩入れしちゃうのは、彼がどこにでもいる普通の男の子だから」

「なんだよ。」

「アブノーマルスベシヤル 異常でもなく特別でもない。あの子は普通の男の子だ。ノーマル」

普通に弱くて。
普通に怖がりで。
普通にがんばって。
普通に悔しがり。
普通に人を好きになり。
普通に誰かを守りたいと思ってる。
だから普通に格好いいのさ。

きみ達は諦めたことも挫折したこともないだろう？それはとても素晴らしいことだ。
だけど善吉くんのように、いつだって諦めながら！いつだって挫折しながら！それでも奮起して戦う者も同じくらい素晴らしいと僕は思うんだよ」

「・・・・・・・・・・」

真黒さんの話に、なんだか納得のいかないという風な顔をする阿久根先輩。

「・・・・・・・・確かに善吉は、もう嫌だとか付き合いきれないとか今回だけとか
言いながら十三年間一度も私から離れなかった。

善吉はずっと諦め続けながらこんなはた迷惑な私のそばにいてくれた。

私が守ってやらねば何もできなかった、あんな普通な男の子がな、だから私は善吉が好きだよ。私は人吉善吉が大好きだ」

これって告白でしょ？

「そうか。多丁拳銃でもきみの命は殺せないのか。
これ

「じゃあ手榴弾だ」

宗像先輩は手榴弾を出し、善吉に投げる。

「ぐっ……しかし爆弾なら……
雲仙先輩とのバトルで勉強済みだ!!」

善吉は手榴弾を蹴飛ばし、池の中に入れる。

ドゴオオン!!!!!!

「いい加減にしろよお前!戦争でもしてるつもりか!?争いは何も生まねーぞ!!」

「いいよ何も生まれなくても。全てを殺せばそれでいい。
だが胸を撫で下ろせ。僕の暗器はロケット砲で終わりだ」

ロケット砲を構え、善吉の方へ向ける。

「ロ……ロケット砲……!!?」

「何考えてんだあの人!」

「そんなもの地下でぶっ放したら……!!」

「当然みんな死んじやうだろうけど知ったことか。後ろの仲間ともども、

消え失せる!!」

「くっ、う、ぐぐぐ、こっこっ、怖えじゃねーか馬鹿野郎！」

ドゴッ！

うまく信管や爆薬の位置を避けて、善吉はロケット砲を壊した。

「よしっ！これで相手の武器は出尽くしたよ！今度こそ『やった』だよね！」

「ところがまだなんだなーこれが！彼は暗器使いである以前に人殺しなんだから！

彼にとって基本、武器は重たくて仕方なかったはずなんだ。だから全ての武器を^{おもひ}手放した今、彼はもうノ口くはないよ」

シュン！！

善吉の目の前から宗像先輩が消えた。

「暗器は終わりだと言ったけれど！殺人はまだまだ終わらないよ――」

そして善吉の背後に回り込み、頸動脈に爪を突き刺す――

――より前に。

ドゴッ！――！！

善吉が振り返り、宗像先輩の頭上に蹴りをくらわせた。

「いいや、終わりだよ。お前は既に限界だ」

ズザアアッ

宗像先輩は吹き飛ばされ、動かなくなった。

「・・・えっと。今度の今度こそ『やった』でいいんだよね？」

「うん！いいよ。実に申し分ない。

普通の人間による普通の勝利だ！」

「・・・・・・・・」

みんなが喜んでいる中、めだかちゃんだけは違う表情をしていた。

「ん？どうしたんだいめだかちゃん。ふて腐れた顔しやって。善吉くんの勝利が嬉しくないのかい？守られる立場はやっぱり不満かな？」

「いえお兄様。そういうことではなく――」

グササッ！！

「・・・・・・・・・・え？」

善吉の背中に5本の刀が突き刺さった。

その後ろでは、宗像先輩が立ち上がっていた。

「暗殺。やっと気を緩めてくれたね。敵の言葉を疑う練習はして」
「なかったのかい？僕は
まだ手持ちの武器を半分も使ってないよ」

「あ——……忘れてましたねそーいやあ」

「善吉iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ！……！」

ドサッ！

善吉は血を吐き、地面に倒れた。

「善吉いいいいいいっ！！！」（後書き）

神様「そういえば、小説の設定進んでるんですか？」

作「全然進まない。能力を考えるのが難しい」

神様「そこらへんは、少しずつやればいいじゃないですか」

作「そうだね。それでは皆さん、さようなら」

「がんばる！――」（前書き）

作「おはこんにちばんわ」

神様「おはこんにちばんわ」

作「テストで合計点数130ぐらいだった」

神様「高校行けるんですか？」

作「さあ？まあいいじゃん。それでは、23話お楽しみください」

「がんばる!!!」

「僕に言わせればみんな大きな勘違いしてる。自分だけ死なないとか自分の大切な人が死ぬなんてありえないとか。そんな絵空事をサンタさんみたいに信じている。」

実際は命なんて、こうもたやすく散るのにさ」

ガクッ

倒れている善吉を見て膝から崩れ落ちるめだか。

「………善吉、善吉………」

「うわああああああああん!!!うわああああああん!!!」

「………きみは人が死んだら人目もはばからずに泣くのかい。それは

とても羨ましい感性だね。

殺したくなってくる」

宗像先輩が発する殺気に、身構える阿久根先輩と喜界島。

「……きみ達はめだかちゃんを連れてもう帰りなさい。この場は僕が引き受けよう。」

どうやら僕は責任を取らなくちゃいけないみたいだしね」

めだかちゃん達の前に出る真黒さん。

「責任？魔法使い——それは普通^{ノーマル}を僕に立ち向かわせた責任かな？」

それともあるいはプラスコ計画の現在^{いま}を立案した責任かな？」

「「！？」」

宗像先輩の言葉に驚く、阿久根先輩と喜界島。

「被害者面するなよ黒神真黒。お前こそが誰より異常^{アブノーマル}なんだから。一年前！お前が理事長に余計な助言^{こと}を吹き込んでいなければ、あの子はきっと死なずに済んだ——」

宗像先輩の言葉はそこで止まった。

なぜなら、後ろで善吉が立ち上がり、殺気を発しているからだ。善吉は体力的にもう終わっているのによく立ち上がるな。

「！——」

「あー……畜生。ウニになった気分だぜ。人を傷つける武器は肌に合わねーつつてんの
に、お肌が荒れちまうじゃねえかよ限界野郎！」

「……よくめだかちゃんを泣かせたな——」

「……善吉、善吉、善吉、善吉……」

「わかってんよ!!」

「……よししておけよ。その様じゃ立っているのがやっただろう。折角助かった命だよ、大切にしろ」

「あれ？おかしいこと言うじゃねえか人殺し《アブノーマル》。そのセリフまるで殺したくないみたいに聞こえるぜ？」

「……世迷言をほざくなノーマル。」

殺すぞ」

バツ!!

身体のうちこちらから、色々な種類の武器を大量に出す宗像先輩。
『ラストカーベット枯れた樹海』が本気を出した。

「……めだかちゃん。ここらでひとつ俺にがんばれって言うてくれねーか？」

「!……がんばれ!!」

「がんばる!!……!!」

ドンッ!……!!……!!

右足を思いつきり地面にたたきつける善吉。

グラグラグラ……

善吉の震脚によって、地下二階が揺れる。

「……ふうん。大した震脚だね、地震が起きたかと思ったよ。けどその程度じゃ僕は倒せないな」

「倒せるさ。確かに俺は立っているのがやっとだけれど、しかしこうして立っているだけで、俺はお前を倒せるんだ」

「？それはどういう意味——」

グサササッ！！！！

「！！！！！！」

天井に刺さっていた刀剣が宗像先輩に突き刺さる。

「ぐっ……この刀剣は……っ!？」

「さっき天井に突き刺しておいたお前の刀剣だよ。それを今の震脚で揺り落としたんだ。」

つまり、俺なりの暗器って奴だな！！

こんなこともあるのかと！無理してあの高さまで蹴り上げといてよかったぜ！！」

「・・・だからってこんなの考え過ぎ——否、怖がり過ぎ
だろ、きみは」

「生憎俺には、怖がりくらいしか取り柄がないもんでね。ま、お互
い肌荒れには気を
つけましょうや宗像先輩——」

全てを言い終わって、倒れる善吉。

ポフッ

それを、真黒さんによって支えられる。

「よくがんばったね善吉くん」

「・・・はい。がんばりました！」

「・・・さて、勝ったはいいけど彼をどうする？指名手
配中の大量殺人
犯。さすがに警察に突き出すかなさそうだが——」

「あー、その心配はご無用ですよ阿久根先輩」

「だってその人、人を殺したことなんかありませんから」

「どういうことだい人吉くん」

「・・・つまりさ、殺す方法に精通してることとはつまり、
殺さない方法にも^{テク}

精通してるってことだろ。実際あれだけの数の凶器を振り回して人間を殺さない方が難しいぜ。

振り返ってみればこの人は、俺を殺さないことに躍起になってい
るようだっ
た。

こんなに串刺し、めった刺しにされているのに、俺が生きている
のがいい証拠だろ」

「え……！？じゃあなんだよ！殺人衝動とか嘔っぱちなのかよ
！？」

「……僕の殺人衝動は本当だよ。人間を見ると、殺したくな
るのも本当だ。だけど僕
は、それをずっと我慢してきたのさ。だって人間は、殺したら死ん
じゃうじゃないか。

だから僕は殺人者を名乗り、派手に凶器を振り回し、派手に殺意
を振り撒くんだ。そう
すればみんな殺される前に逃げてくれるからね。僕は人殺しになら
ずに済む」

「……しかし危険な真似をするよね人吉くん、刀剣の雨を降らせ
るだなんて。きみこそ
人殺しになるつもりかい？」

「カット！殺さない方法に精通してるってことはつまり、殺されない
方法にも精通してる
ってことだろ。そこはあんたの異常性とやらを信用したんだよ」

「信用か。そんなのされたことなかったな。

やっぱりきみとはとても仲良くなれそうなのがするよ。人吉くん、きみは僕と友達になってくれるかい？」

「・・・あのなー、今更何言っただよあんたは。殺すつもりがあるうとなかうと！あんたと俺は命がけで戦ったんだぜ？」

つまり俺達はもう友達じゃねーかよ。そんなよそよしいことを言われたら傷つくぜ！」

そう言って手を差し出す善吉。

そして、握手をかわした。

「じゃあ、次の階に行くか」

そろそろ俺も行動しないとな。

「がんばる！……」（後書き）

作「ふう、ピグライフでもするか」

神様「最近ピグライフばっかやってますね」

作「超楽しいZE ピグライフ」

神様「そうですか。それでは皆さんをようなら〜」

「……………取引?」(前書き)

神様「そういえば、小説はどうですか?」

作「タイトルはできたけど。設定は少ししかできてない」

神様「能力の方はできましたか?」

作「まあ、少しはできたけど、ルビが難しいんだよね」

神様「がんばってくださいね」

作「はい。ではでは皆さん24話お楽しみください」

「・・・・・・・・取引？」

俺達は今、地下三階に居る。

「・・・・・・・・なんだこれ・・・・・・・・動物園・・・・か!？」

そこには、ゴリラやキリンなどの動物が多数いるのだ。

「ぜ・・・・・・・・善吉! しっ、しっしっしっしっ、しさっしさっ、視察視察視察!」

「・・・・・・・・そうだな。突っ立っててもしょうがねーし。とりあえず見て回ろっぜ」

ダダダダ!!

善吉がそう言つと、めだかちゃんがつれしそうに走って行った。

嬉しそうだなゝめだかちゃん。動物避けが通じてないのが嬉しいんだろっな。

「では、こっちの端から順番に愛でよう! ほら、喜界島会計もこっちこっち!」

「・・・・・・・・」

次の喜界島が言った言葉で、この場の空気が壊れた。

「私どーぶつきらい。行くなら一人で見に行けば？」

ピシッ

めだかちゃんの心にひびが入った音が聞こえたような。

「~~~~~っ！」

めだかちゃんはパンダを指さす。

「白黒模様が気持ち悪い。媚びたメイクを見てるよう」

「~~~~~っ！」

今度はコアラ。

「なんか灰色だしぬいぐるみチック。生き物みたいな気がしない」

「~~~~~っ！」

最後にゾウとキリンだ。

「首が長いとか鼻が長いとか、キャラ付けが受け狙いっぽくてすごく嫌」

「（この女……『かわいい』がまったく通じねえ！）」

「……………フッ」

めだかちゃんは鼻で笑うと喜界島の近くに行き、

そして、

ぐぎぎぎぎぎ……………

押し合いみたいな状況になる。二人とも目が真剣だ。

「おい！さっきまで仲良かった女子がくだらねーことで喧嘩を始めたぞ！

誰か止める！！」

「俺は嫌だ。まだ死にたくないからな」

「……………そんなことより善吉くん。少しおかしいと思わないかい？」

「ええまあ気付いてますよ。」

ここにいる動物達は、めだかちゃんをまったく怖がっていません。よっぽどよく馴けられているのか、薬品でも使われているのか、いずれにしても

異常です」

「そう——つまり、ここもただの動物園じゃないってことだよ。僕の世代には

なかった設備だ。

管理しているのはだから多分、僕の知らない^{じせだい}二年生だろうな――

――side――

阿久根は一人で調べていた。

この地下十三階のことを。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「やつほー高貴くん。ちよつくら俺とトークしよーぜ」

「!？」

「おおっと！大きな声を立てねーでくれよ。俺はお前と二人きりで話してーんだからよ。」

えーっと！どうだ？自己紹介は必要か？」

「・・・いや、必要ないよ。きみのことなら知っているし憶えているよ。」

なにせ元クラスメイトだからね。^{スペシャル}十一組から^{アブノーマル}十三組に移籍になった変わり種！

二年十三組 名瀬天歌さん！

『十三組の十三人^{サード・パーティー}』と聞いた時にピンと来たし、この悪趣味な実験動物園を

見た時に確信したよ。『十三人^{パーティー}』のメンバーにきみが含まれているだろうとね」

「ハハ！柔道界の王子様に憶えててもらえて光荣だな。だったらか

つたりー前置きは
抜きだ。手っ取り早くいこう。高貴くん俺と取引しようぜ」

「・・・・・・・・取引？」

「話は簡単だよ。お前らもう帰ってくれねーか？いや——いい
っその学園から出て行ってくれよ。」

俺達の研究の邪魔なんだ」

「・・・・・・・・」

「勿論タダとは言わねーさ。黒神のことは諦めよう理事長には俺が
話をつけてやるし。お前ら

全員の転校手続きも俺が取ってやる——どこの名門校でも逆指名
しな、そこで好きなだけ
生徒会を執行してろや。

これ以上後輩に怪我させたくねーだろ？俺達も怪我したくねーし、
折角の人生だ、お互い
関知せずにいこうぜ」

「・・・・・・・・去年と別条のない勝手な言い分だね。名瀬さん」

阿久根は迷う余地も見せずこう即答した。

「だけど悪いが関知させてもらうよ。俺達は箱庭学園の生徒会執行
部なんだから！」

「ふーん」

天井から古賀いたみが現れ、阿久根の首におそらく鋼鉄の糸をかける。

「なっ・・・・・・・・・・!？」

阿久根が気付いた時にはもう遅く。

ブツンッ

「……………取引？」（後書き）

作「よし、設定でも考えるか！」

神様「がんばってくださいね」

作「ルビを考えるのが一番大変だぜ」

神様「そこらへんは友達とかに協力してもらえば
いいんじゃないんですか？」

作「それもそうだな。それでは皆さん、さようなら」

「俺の何かになってくれ」(前書き)

作「どうも〱作者で〱す」

神様「今日はテンション高いですね？」

作「あともう少しで新しい小説ができるんだよ！」

神様「それはよかったですね」

作「それでは皆さん、25話お楽しみください」

「俺の何かになってくれ」

中学生時代、阿久根高貴は不良^わかった。

規律^{コト}であろうと

器物^{モノ}であろうと。

人物^{ヒト}であろうと。

区別なく壊してのける阿久根のことを地元で知らない者はおらず、彼は教師陣はおるか警察でさ手がつけられない札付きだった。

とは言え、彼は何も目に付く全てを破壊対象としているわけなかった。

実は彼はある男から言われるがままに、破壊活動を行っていたのである。

『ねえ高貴ちゃん』『新入生に黒神めだかって可愛い子がいるんだけど』『知ってる?』

『ああいうおてんばな子は』『僕達の平和な学園にはふさわしくないんじゃないかなあ』

「………知りませんけど、生徒会長のあんたがそう言うならそうなんでしょうぜ。」

球磨川さん」

1年1組の部屋

まだ授業中の教室の扉が開き、

ドゴッ！！！！！

阿久根は黒神めだかを鉄パイプで殴った。

「きゃああああああっ！！くっ………黒神さんっ！！」

「保健室に……いや救急車を呼べっ！！」

このように、与えられた任務^{はかい}を着実にこなす彼は、畏怖と侮蔑を込めて

こう呼ばれていた。

破壊臣。

この頃の彼はいつも苛々していて、なんであれ破壊活動を行えば少しだけスカツとする。

そんな自分をイケていると思ってたし、
新人生、黒神めだかも彼にとってはストレス発散の対象でしかなかった。

しかし、

次の日、黒神めだかは包帯を巻いて登校してきた。

（あれ・・・？登校してきやがった。人間を壊し損ねるとは我ながら珍しいぜ、髪の毛
が邪魔だったのかな。でもま、壊れなかったのならそれもまたよしだ）

（どうせ壊しなおすだけだし）

ドゴッ！！！！

阿久根はまた鉄パイプでめだかを殴った。

「球磨川さんが目をつけるだけあって、そこそこ根性のある女だったな。 だけど、
これで終わりだ」

だけどこれでは、終わらなかった。

翌日も黒神めだかは、平気な顔をして遅刻もせずに登校してきたのだった。

翌々日も、

その次の日も、その次の日も、

阿久根がいくら壊そうと、彼女はまるで意にも介さなかった。

中学生一年生の頃の黒神めだが、『全盛期』と呼ばれるのはこの辺りの出来事に由来する。

『破壊臣』阿久根でも壊せない金剛石のごとき女子として、皮肉にも彼女は名を上げていくのだった。

そしてそれは同時に、『破壊臣』の凋落をも意味していた。女の子一人も壊せない破壊臣のことを、恐れる生徒はもういなかった。

その気運に乗って学校中にくすぶっていた反阿久根の生徒をまとめ上げたのは、

間違った中学デビューを目論んで若干グレかかっていた頃の人吉善吉である。

「俺の幼なじみを散々なぶってくれたことについて、何か言うことはありません

か？ 阿久根先輩」

「ねーよ。俺には何もねーんだ」

「・・・・・・・・あつそ」

善吉がパンチをくりだす――

「やめんか馬鹿者！！」

その拳が当たる前に、めだかの『黒神ローリングソバット』が善吉の顔に炸裂した。

「貴様たち、ここで一体何をしておる。

たとえどんな理由があろうとも！弱い者いじめは許さんぞ！！」

無抵抗も避けないのも当たり前だった。

彼女は阿久根の不良さも破壊こわさも、まったく問題にしていなかったのである。

「阿久根高貴！

貴様もかつては弱い者を慈しむ優しき心の所有者だったに決まっている。

比類なき恐怖に満ちた幼少時代を過ごしたがゆえにそのような壊し屋になってしまった

としか考えられん。

安心しろ！貴様が人間らしい心を取り戻すまで、貴様の破壊衝動に私がいくらでも付き合ってやる！！」

見当違いもいいところだった。

阿久根にはそんなわかりやすい理由なんて何もない。

大した理由もなく道を踏み外し、
大した信念もなく周囲を傷つけ、
大した理由もなく苛々していた。

あるがままに生きて

なすがままに暮らし

言われるがままに壊してきた。

それが阿久根高貴の人生だった。

だからこそ、

「……悪いな黒神。俺には何にもねーんだ。だから……」

だからお前が、俺の何かになってくれ」

破壊臣は、改心した。

その改心こそが新入生・黒神めだかと、生徒会長・球磨川禊の対決
の火種となるのだが、

それはまた別のおはなし――

「ぐっ……!」

阿久根はいたみの攻撃をぎりぎり腕でガードした。

（走馬灯！今のが！今のが走馬灯か！！）

「ひゅうつうつうつ！真上からの不意打ちをガードするとかさっすが高貴くん！

抱つかれてえくくくくくくく！けどま、一瞬気が逸らせりやそれで十分なんだわ」

ピッ

ガララララ！

天歌がスイッチを押すと、非常用のシャッターが降り、簡単にあつちと分断された。

「こうして戦闘パートに入ったことだし、やっぱ自己紹介はしておいてやるよ。」

俺は二年十三組『ブラックホワイ黒い包帯』の名瀬天歌。フラスコ計画の今期統括を任されてやってる」

「私は私で二年十三組『骨折り指切り《ベストペイン》』の古賀いたみー！可愛い名瀬ちゃんのが可愛い大親友だよーんっ！」

「フラスコ計画の統括って・・・」

「さてさて高貴くん。お前をこうやって孤立させたのには理由がある。」

俺が見るところたぶんお前がもつとも！黒神めだかによって変えられた人間だからだ！！」

「・・・・・・・・・・」

「人間を完成させるというフラスコ計画の目的においてお前以上のサンプルはいねーよ。

変える黒神より！変わらない人吉より！俺はお前に興味があるねえ旧破壊臣！！」

ピッ

天歌が再びスイッチを押すと、動物が入っているガラスが開き、動物が出てきた。

「んじゃまーとくにご覧じろ！名瀬ちゃん古賀ちゃんの、わくわく実験動物ラァーンド！！」

「俺の何かになつてくれ」(後書き)

作「そういえばツイッターを始めたんだけどさ」

神様「どうかしたんですか？」

作「ツイッターあれ英語だから意味分らない」

神様「そうですか。それでは皆さん、ごきげんよう」

「『『『『負け犬軍団参上!!』』』』』 (前書き)

神様「そういえば、小説出来たんですか？」

作「出来たZE。でも、結構書いてから投稿しようと思う」

神様「まあ、頑張ってください」

作「頑張ります」。それでは皆さん、26話お楽しみください！」

「『『『『『負け犬軍団参上!!』』』』」

ガンッ!!

善吉は非常シャッターを思いっきり蹴りつける。

「くっそなんだこの頑丈なシャッター！微動だにしねえ!!エヴァンゲリオンでも格納してんのかこの施設は!!」

そこへ、フロアを一通り見てきた真黒さんが戻ってくる。

「善吉くん。フロア一周してきたけどやっぱり阿久根くんはどこにもいなかったよ」

「カツ！つーことはやっぱりこん中に閉じ込められたってわけですか！
どっかの女子二人が喧嘩している間に、どっかの女子二人が喧嘩している間に！どっかの女子二人が喧嘩している間に!!」

「おい、どこかで女子二人が喧嘩しておっいたらしいぞ」

「ふーん、どうしてみんな私達みたいに仲良くできないんだろうかね？」

いや、あなた達だから。

「大体善吉、貴様は一体何をイラついておるのだ？」

「あ？」

「だってそうであろう。私達のうち誰かというならまだしも、孤立させられたのは

阿久根書記だぞ？ゆえにまったくもって心配いらぬ。

あやつは貴様よりも私よりも誰よりも強いのだからな！」

あの人、元破壊臣だからな。

「向き不向きはともかくとして、こと破壊せんとうとなればあの男に勝てる者など存在せんよ」

「・・・・・・・・」

善吉が納得いかない顔をする。

「だからそれよりも己の周囲に気を配れ。この状況、閉じ込められたのは案外私達の方かもしれんぞ——」

「それじゃあとりあえず次の階に進まないかい？ここで待ってても仕方ないし」

「それがいいな。阿久根書記は大丈夫だろう」

「会長さん俺ここに残っていいですか？」

「何故だ？」

「もしかしたらまだこのフロアに何か仕掛けがあるかもしれないから。」

残って探そうと思ってるんですよ」

まあ本当は違うんだけどね。」

「・・・・・・わかった。頼むぞ真夜」

「わかりました」

めだかちゃん達は俺を残して四階に行った。

「めだかちゃんが名瀬先輩たちに捕まるまでなにしようかな？40分くらい寝るか」

40分経過

「ふわあゝゝ。よく寝た。そろそろ名瀬先輩たちの所に戻るか」

地下十三階

「名瀬先輩、古賀先輩ただいま」

「あ、真夜君おかえり」

「真夜お前遅かったじゃねえか」

「すいません眠ってました。それより会長さんをなんで攫って来たんですか？」

「こいつを攫って来たのは、黒神めだかに別人格をぶち込めば一体どうなるのか
っつー実験をするためだよ」

「それだったら時間稼ぎはどうするんですか？」

「そっぴゃ時間稼ごうにも、高千穂先輩も宗像先輩もやられちまっ
たんだよな」

名瀬先輩がそう言っていると後ろから声がした。

「お困りのようだな名瀬統括。なんなら時間稼ぎは私達が担当して
やっても
いいぜ？」

「義を見てせざるは勇なりきり！仲間のピンチを見逃さないこの私
だ！」

「仲間？ああ、私達ってそういう設定でしたっけ（棒読み）」

「そんな女はどうでもいいです。けれど、都城に恩を売れるというのは悪くありませんね」

「・・・・・・・・」

「俺は普通^{カス}がそばにいうだけで不愉快だ。頼まれなくても駆除にいくつもりだったぞ」

「同感です。普通^{ミミ}は分別せずに捨てましょう」

「・・・・・・・・」サーティン・パーティ
「十三組の十三人」・・・・・・・・「裏の六人^{フラスシックス}」

「それじゃあ、時間稼ぎはまかせたぜ」

「ああ、任せておけ」

そのまま『裏の六人』は一階に向かった。

「それじゃあ、俺も自分の階に行こうかな」

「真夜なんで自分の階に行くんだよ？どうせ生徒会は『裏の六人』にやられるだろう」

「なんとなく邪魔者が来て生徒会を助けるような感じがするんで自分の階に行くんですよ」

まあ本当に邪魔者が来るんだけどね。

「?side」

「なにいつ！逃げるだって！？正気で言ってるのか人吉くん！！」

阿久根が善吉を壁に叩きつける。

「逃げるとは言ってねーですよ。一旦退いて地上に戻るってことです」

「同じことじゃないか！！見損なつたぞ人吉くん！めだかさんが囚われているというのに！」

しかも事態は一刻を争う——「わかってますよそんなこと！でも現実はどうです！？」

「めだかちゃん一人だけを助けられりゃ、それでいいわけじゃないでしょう！俺達は生徒会

執行部なんだ！箱庭学園に通う全生徒を助けるために活動していることを忘れないください！」

「ぐっ……」

「……ケツ！相変わらずだなテーマーらは、この戦況でも助けることばかりで！ちよつとは
助けてもらおうと思わねーのかよ？」

「えっ……！？なんであんた達がここに……！？」

後ろから声がして善吉が振り向いた。

「なんでって・・・随分不愉快な物言いですな人吉くん！」

「いやなに大事な後輩が困つとるゆーて不知火ちゃんに教えてもー
て、おっとり刀で
駆けつけたちゅーわけやん」

「907868676478088665」

「俺とか的にはあれか？そんな弱い奴らに負けた覚えはない。お前
達を倒すのは

この俺だ―――か？」

「それを言ったら僕達は全員生徒会に負けてるだろ。普通に友達を
助けたいで
いいんだよ」

「ケケケ！まあ理由とか御託とかいーだろうが！まずはカッチョヨ
ク登場シーンを
決めさせるや」

「「「「「負け犬軍団参上！！」」」」」

「『『『『負け犬軍団参上!!』』』』』(後書き)

神様「久しぶりに真夜さん出てきましたね」

作「そうだね」

真夜「俺が出てくるの超久しぶりじゃね？」

作「気にしない、気にしない。次回も出るから」

真夜「いや、気にするだろう。次回も出るのは本当か？」

作「本当だ。嘘だったら神様を殴っていいぞ」

神様「なんで僕なんですか!？」

真夜「わかった」

神様「なんで真夜さんも納得するんですか!？」

作・真夜「それでは皆さん、次回もお楽しみに!」

神様「嘘ですよね!僕を殴るって嘘ですよね!？」

「なっ……なんで」(前書き)

作「どうも。作者です」

真夜「はやめる気持ち悪い」

作「なんだよ！真夜だって 使うくせに！」

真夜「使わねえよ！それに今回の話は俺の出番はあるのか？」

作「まあまあ。見てみればわかるよ」

神「頼みますよ。真夜さんの出番がなかったら殴られるの僕なんですよ」

作「それではいつてみよう！27話お楽しみください！」

「なっ……なんで」

「「「「負け犬軍団参上!!」」」」」

「ばっ……馬鹿なっ……!どうしてあんた達がここに……っ!？」

あんた達は確か生徒会おれたちとの戦いに敗れて死んだはず!!」

「死んでねえよ(怒)」

「どうしても何も!あなた方がピンチだというから、わざわざ助けに来てあげたんじゃないですか!」

「そうそう!不知火ちゃんから教えてもってな」

「不知火……?不知火!つまりあいつが!俺達のために学園中を駆け回って、みんなに助けを求めてくれたってことですか……!？」

善吉が猫美が言った言葉に感激していたら。

「「いやツイッターで」」

ツイッターを見てみるとそこには、

【生徒会ピンチ。メンバー損なう。】

と書かれていた。

「雲仙先輩。来てくれたのは嬉しいですけど、しかし状況は全然好転してませんよ。」

高千穂先輩や宗像先輩は言うまでなく、先輩や先輩のお姉さんにしても服の下はボロボロ
でしょう？ 実際は怪我人が増えたようなもんですよ」

「ケケケ！ 顔に似合わず意外と雰囲気流されねー奴だな。しかしそのクールな目で現実を

見ろや、オレはあいつらのことをよく知っている。すぐに助けにいかねーと黒神は手遅れになる

し、ひいてはフラスコ計画が完成しちまうんだ。

そうなったら生徒会どころか——箱庭学園そのものが壊滅するぜ」

「・・・それがわかっていたからこそ、きみは風紀委員長としてフラスコ計画を
内偵していたとでも言うつもりかい？」

「確かに黒神ならオレに代わってフラスコ計画をぶっ潰してくれるんじゃないかと
期待してた。だからオレは肩の荷を降ろしたみてーな気分だったんだけどな。」

ケケケ！ まーそれ以上怪我すのが嫌ならもう帰っていいぜ人吉くん。あとはオレ達

チーム負け犬が引き継いでフラスコ計画をぶっ潰してやるからよ。

ブルってるテメーに代わって
しっかり助けてきてやるから安心しな」

「………そういうことを言ってるんじゃない！あんた達が
無事じゃ
済まないって言ってるんだ！」

「はあ？テメーに心配される筋合いはねーよ。オレ達はそもそも生徒会の敵なんだから
ほっとけや、潰し合ってくれりゃラッキーくらいに思っとけ」

「ああ！俺だつてそう思いたいさ！だけど！だけど自分のために誰かが傷ついたら
めだかちゃんは絶対に泣くんだよ。俺はもう二度とめだかちゃんが泣くところなんて
見たくない………」

善吉が涙を流す。

「……ケツ。テメーが泣いてんじゃねーかよボケ！」

「……ちゅーか。盛り上がつとるとこ水さして悪いんやけど、地下十三階まで直通の
エレベーターが入口んとこにあったやん。あれ使たらあかんの？」

（（（（ナイスアイディアだけど……え〜〜〜〜？それ言っちゃダメなんじゃないの？）（？）（？）

ピッ

ピッ

ピッ

ピ——ッ

「ほーい。パスワード入力完了ー これでエレベーターちゃんすぐ来るぜー」

「やっぱりすごいんですね 『^{パーティ}十三人』 は！あなた達もあれと同じことができるんでしょう？」

「いや。俺達はあのエレベーターは使えねーよ」

「ああ、いつも移動には階段を使ってるよね。実際このエレベーターを動かせるのは
『^{パーティ}十三人』 の中にも七人しかいないんだ。
つまり雲仙くんとあとは 『^{プラスシックス}裏の六人』 と呼ばれている連中だけなのさ」

「『^{プラスシックス}裏の六人』？」

「うん。いるんだよそういう奴らが、黒神さんが化物ならあの六人は魔物だろうね」

「ケケケ！まあそう怯えんなよテメーら。裏の六人だろーが甲賀の七人だろーが」

ヴーッ

チンッ

「どーせそいつら全員ショートカットできるんだからよ」

ガ——ッ

「って！なっ……！！？『裏の《プラス》……^{シックス}六人』」
！！

エレベーターが来たがその中には『裏の六人』がいた。

「にひひひビンゴォ！エレベーターでワープなんてこすい卑怯者の考えそう

なこったぜ！だが生憎私達にかかっちゃあその程度の作戦はお見通しなんだよ——！」

「ぬうつ……返す言葉もあらへんっ！」

（（そりゃそうだ！））

「つーかおい雲仙。高千穂。宗像ア！なんでそっち側に立ってんだよ。」

ひよっとして裏切ったのかお前ら——？」

「……裏切ったんじゃない表立ったのさ」

「それに『^{おまえら}六人』と仲間だったつもりはねーよ」

「かー！悲しいこと言うねえ！んじゃしょーがねー敵として！改めて挨拶しとこうかな」

「糸島軍規だ。仲良くしてね」

「湯前音眼だよ。仲良くしてね」

「百町破魔矢なる者です。仲良くしてね」

「筑前優鳥・・・らしいんだ。仲良くしてね」

「鶴御崎山海という。仲良くしてね」

「上峰書子と申します。仲良くしてね」

『仲良くしてね』の部分が相手に嫌悪感を感じさせる。

「・・・おい。人吉状況が変わった予定変更だ。ここはオレ達チーム負け

犬が引き受けるからよ。テメーらは階段で地下十三階まで向かえ！」

「！？なっ何を言って・・・」

「こいつらが揃ってここに来た以上今なら最下層までほばがら空きだぜ」

「馬鹿言っな！あんた達を行くなんてできるわけ——」

「るっせえボケ！足手まといだから消えろっつつてんだよ！！既に

問題はフラスコ計画が

どーとかじゃなくて！オレ達がこの場をどうやって生き延びるかっ
てことに変わってるんだ！！

このピンチを切り抜けるには忌々しいが黒神の力が必要だ。 テメ
ーらがさっさと黒神を

助けて！あのバケモノ女と一緒にここに戻ってくるしかねーんだよ
！！」

「ありがとうございます雲仙先輩！恩に着ます！すぐに戻るからそ
れまで

持ちこたえてください！！」

「ククク！意外とえーとこあるやん雲仙くん」

「・・・違 - よボケ。 オレを『実はいい奴』みてーに言っ
てん
じゃねえ。

ただまあオレは十歳だろうと先輩なんでな後輩の涙にや弱いんだ
よ」

「何匹か逃げてしまいましたねどうします？」

「んー。 まこの辺掃除しようよ。 それからでも全然余裕で間に合う
でしょ」

「賛成の反対の反対だな！」

地下十一階

「あと二階で十三階だ」

善吉が十一階の扉を開ける。

「なんだこの部屋？イスと机しか置かれてないぞ」

「やっと来たか善吉達。遅かったな」

「「「！！」」」

部屋の奥から聞こえた声は善吉達が知っている人物だった。

「まあ自己紹介からするか。『十三組の十三人』^{サーティン・パーティー}に新しく入った神城真夜だ。

検体名は『道化師』^{クラウン}仲良くしてね」

「なっ……なんで真夜がここにいるんだよ！」

「なっ……なんで」(後書き)

作「ね。出番有っただろ!」

真夜「有ったけど少なすぎるだろ!」

神「まあまあ。次は絶対にありますから。でしょ作者さん?」

作「うん。あるに決まってるじゃん!」

真夜「その言葉を信じよう」

作・神・真夜「それでは皆さん!さようなら」

「俺と遊びで勝ったらいいぜ」(前書き)

作「あと2話で30話が長かったような短かったような」

真夜「まあお前が投稿するのをもっと早くすればもっと行ってたかもな」

作「・・・・・・・・・・」

神「まあまあ。いいじゃないですか」

作「ということで28話お楽しみください」

「俺と遊びで勝つたらいいぜ」

「なっ………なんで真夜がここにいるんだよ！」

「それは俺がここの階の住人だからさ」

「ふざけるな！！！」

善吉が俺に怒声を浴びせる。

「ふざけてねえよ。俺はいつもまじめだぜ」

「真夜くんを倒さないと次の階に通してくれないのかい？」

阿久根先輩が俺に質問してくる。

「そうですよ。俺を倒さないと次の階には進めませんようします？」

「時間がないからすぐ終わらせてもらっよう！」

「お前をぶん殴って目を覚まさせてやる！」

善吉と阿久根先輩が俺に殴りかかってきたが俺は高千穂先輩の『オート自動操縦』で避けた。

「なっ………」

「おいおい。俺が旧破壊臣の阿久根先輩と宗像先輩を倒した善吉に勝てると思ってるのか？」

「今のは確か高千穂先輩の反射神経！？なんで真夜が使えるんだ！」

「それは使えるから使ってるんだよ」

「だけど善吉達と相手するのは疲れるからな！」「動くな」

俺は都城先輩の『人心支配』を使う。

「これは都城先輩の『言葉の重み』だと！？真黒さん真夜の異常はなんなんですか！？」

「……僕の『アナリシス解析』でも分からない」

「俺は優しいから異常を教えてやるよ。俺の異常は『コピー物真似』相手の異常を使えるようにする異常だ」

「異常すぎるぜ！」

「それにしても会長さんは凄いやな。あの旧破壊臣を改心させたんだからな、俺には絶対できないぜ」

「そんなことはどおでもいい！早く次の階に通してくれ！」

善吉が俺に頼む。

「それは無理だ善吉。俺は時間稼ぎをするために此処にいるんだからよ」

「頼む真夜！早くしないとめだかちゃんが！」

「じゃあ、俺と遊びで勝つたらいいぜ」

俺は善吉達にやった『人心支配』を解いた。

「遊びつてなんだ？」

「ルールは簡単だ。善吉と阿久根先輩が俺に一発でも触れれば通してやるよ」

「よし。わかった。すぐ終わらせてやる！」

「次は当ててみせる！」

また、善吉と阿久根先輩が向かってきた。

「そんなんじゃ一生触ることはできないぜ！」

やっべー、テンション上がってきた！

「それならこれはどうだ！」

善吉が後ろから殴ろうとしたが・・・

「残念でした〜」

そう言って俺は善吉を蹴っ飛ばした。

「ほらほら！どうしたこれで終わりか？」

「まだまだ！」

善吉が俺に向かってこよとした瞬間にケータイが鳴った。

「はいもしもし。え！？通じていいんですか？はい。わかりました」
時間稼ぎはもういいらしい。

「善吉通っていいぞ」

「なっ！？通っていいのか？」

「ああ。けど、もう手遅れだと思うけどな」

「！？」

善吉達は俺の言葉を聞くとすぐ次の階に行ってしまった。

「あゝあ。テンション上がったのにな。まあいいや寝るか」

そう言って俺は寝た。

「俺と遊びで勝ったらいいぜ」(後書き)

真夜「おい。俺の出番少なすぎじゃないか？」

作「・・・・なっ・・・・勘違いですよ」

真夜「よし！歯を食いしばれ！」

作「助けて！神様！」

神「・・・・逝ってらっしゃい」

作「漢字違くない！それも違うところ行くから！」

神「それでは皆様また来週」

作「ぎゃああああー！！！」

お知らせ

読者の皆様にお知らせです。

まことに勝手でございますが、当作品異常でもあり過負荷でもある転生者の連載を終了させていただきます。

理由についてはオリジナル主人公が後半から空気になったりしたり話が
変になってきたので今一度考えなおそうと思います。

今まで読んでくださった方々には大変申し訳ございませんが、当作品は連載を終了
します。

今後は新しく作品を投稿する時は、しっかりとした作品を書きたい
と思います。

また新しく作品を投稿する時は、また応援をよろしく願います。
改めて皆様に、お詫び申しあげます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4667t/>

異常でもあり過負荷でもある転生者

2011年11月14日09時29分発行